

ひたぎこよみ4

〇〇一

郊外の地方都市は、ヒートアイランド現象などとは無縁なのだろう。もつとも、僕の住んでいた家は、地方都市から更に遠い、田舎町だつたりするのだけれど。

新鮮な景色が広がる。

新しい生活。

期待と不安。

でも。

右手には火憐ちゃん、左手には月火ちゃん。慣れ親しんだ感触が心強い。

「おい、そんなにべつたべつたくつくなよ」

でも。

「おい、そんなにべつたべつたくつくなよ」

家中の中ならともかく、外なんだからもう少し考えてくれないかなあ。それでなくとも、大きくてジャ

ージの似合う女の子と、小さくて和服を着こなした女の子で——なんというかこう、目立つんだからさ。

そんな僕の想いなんておかまいなしに、火憐ちゃんはじやれついてくる。大きな妹が無邪気にじやれ

「今行くから待つてくれって」

妹達に急かされるまま外へと出ると、目の前が曇

るくらいに息が白い。

もう春になるはずなのに、刺すような寒さ。

鍋と、フライパンと、ええと、やかんと——いや、やかんより電気ケトルの方が便利だつて言つてたな。ケ原さんの方が、この手のことは経験豊富だから、やつぱり素直に聞いておいた方がいいだろう。

——ダンボールがいくつか残つている、まだ、慣れない部屋で。

「おーい、兄ちゃん、はやく行くぞ」

「もお、お兄ちゃん、はやく行くよお」

玄関前で、火憐ちゃんと月火ちゃんが騒ぐ。

「今行くから待つてくれって」

妹達に急かされるまま外へと出ると、目の前が曇

るくらいに息が白い。

ついてくれるのは素直に嬉^{うれ}しいけど（いつもは関節技なりなんなりだから）、腕に当たる柔らかさと暖かさは、本当に気持ちいいのだけれど。

とびつきりの無邪気さ。
半端^{はんぱ}ない攻撃力。

それゆえに。

こいつの場合は、やつぱり怖かつたりもするんですよ。何かと引き換えに生殺与奪^{せいさつよだつ}の権を握^{にぎ}られているというか、そういう精神的な面が。

そういえば、神原にもそんなところがあつたかもしれない。こんなところはさすが、師匠と弟子といつたところだろう。神原の場合、その恐怖の対象はフルボッコにされたというか——まあ、なんというか、例の左腕に殺されかけたことよりも、その後のデートの方だつた。戦場ヶ原の指示で行つた、あのデートだ。やっぱり、あの頃の戦場ヶ原は怖かつたから。

「ああ、今日は用事があるんだつてさ。本当は、一緒に行く予定だつただけどな」

じやない部分も、色々とすごく怖いのだけれど。
勿論^{もちろん}、その分だけすごく、本当はとても優しいのだけれど。

「今日は戦場ヶ原さんどうしたんだ？ いつも一緒にのくせに」

火憐ちゃんは屈託^{くつたく}のないとてもいい笑顔で、珍しく僕を見上げながら言う。普通に立つていれば僕よりも背が高いから、こんなことは滅多にないのだが。僕の右腕の痛さと恐怖と気持ちよさと引き換えの、珍しい位置関係。

そんな火憐ちゃんは神原先生との関係もあり、戦場ヶ原大好きっ子なのだ。とはいって、こいつの場合は、誰でもいいんじゃないかと思つてしまふこともあるのだが、でもまあ、火憐ちゃんにとつて、やっぱり神原先生は特別だしな。戦場ヶ原のことも特別に想つてくれているのだろう。

——早朝。

暖かで柔らかく、いい匂いのする……湿度の高い
微睡まどろみの中だつた。

ひたぎの携帯電話が鳴り、彼女が布団からそおつと出ていったところまでは……なんとなく覚えてい る。僕の皮膚から、柔らかで暖かで触り心地のいい——そんな、安心できる感覚が、失なわれていつた ような気がしたから。気持ちよさと氣だるさの中間で、とても寂しく思つた覚えがあるから。

はつきりとではなく、あくまでも、なんとなくだつたけれど。

なんとなく曖昧あいまいなのは——僕はその後、お昼近くに目が覚めるまで、本当に記憶がなくなるんじやないかつてくらい、起きることができなかつたからだ。泥のように眠つていたからだ。もう、ドロドロになるくらいに。

何故なら——

昨日の夜から空の色が変わるくらいまで……この

季節だから大分日が長くなつてきたとはいえ、空の色が変わるつていつてもほとんど朝のことなのだけれど、その間、ずっと——あれだつたから。

吸血鬼体质になつてから睡眠についてはそれほど気にしなくともよくなつた僕が、睡魔にこれだけ一方的に負けてしまうのは、こんなときくらいだつた。普段の睡眠をさほど必要としないかわりに、その、なんというか——いわゆる……事後に酷い眠気を感じることがあるのだ。つまり、これは吸血鬼特有の性質なのだろうと思い、前にそれとなく忍に聞いてみたことがあつたのだが、心底呆あきれた顔で、吐き捨てるようにな「やりすぎじやろ」なんて言われてしまつたのを、今更ながら思い出してしまった。

そんな夢のような今朝、といふか、昼近くの寝起きは、やはり夢のようで——

『こよみへ。

ごめんなさい、急用ができました。
気持ちよさそうに寝ていたから、黙つてシャワー

を借ります。

後で、電話します』

なんて。

そんな珍しい書き置きが枕元まくらわになければ、やはり

それは、現実のこととは思えなかつたかもしれなか

つた。

正確には、その直後に自分の下半身やシーツの状態で、それが夢でなかつたことを再確認させられる

ことになるのだけれど……。

そんな、夢のようなのに生々なまなましい話を妹達にできるはずもなく――

だから、僕はちょっと曖昧に答えるしかなかつたのである。実際のところ、書き置きの内容からも、そう答えるしかなかつたのだが。

勿論、戦場ヶ原に電話をしようかとも思つたけれど、急用らしいし、電話をくれると書いてあつたし、あまりしつこくしても――なんて思い、こちらからは連絡をしていなかつた。

連絡をすれば、きっと戦場ヶ原は喜んでくれると思うけれど。

「へえ、あの戦場ヶ原さんが用事だなんて、珍しいこともあるもんだな」

……微妙に失礼な物言いである。

火憐ちゃんめ。人の彼女を暇人扱いするな！ 戰場ヶ原だつて、僕やお前らばかりをかまつてゐるわけにはいかないんだよ。

「そうだね。どうしちゃつたんだろうね」

同じく、月火ちゃんが首をかしげる。こいつ、どちらかといふと羽川派で、一時期、戦場ヶ原のことを見怖がつていたというか、かなりビビつたりしてたことがあつたのだが、最近は「なんか戦場ヶ原さんつて、本当、クールビューティーでカッコよくて、ちょっと近寄りがたい感じがしたけど、なんか話してみると優しいよね。ていうかちょっと変？」ていうか面白い人？」なんて笑いながら言つてたから、本当に戦場ヶ原をよく理解してくれてゐるみたいだ

つた。

つうか、どうも戦場ヶ原は、妹達の前でやたらとクールビューティーとツンデレ——というかツンツンを気取つてゐるからなあ。

別に、普通にしてればいいのに。見た目はクールビューティーなんだからさ。

まあ、それが作りだつてのはバレバレなんだけど。

火憐ちゃんは仕方ない（火憐ちゃんは、どんどん設定が酷くなつてるなあ……）としても、鋭い月火ちやんに気付かれないと気がつかつた。

ていうか。

普通気付くわ。

とにかく、デレとかドロを見せたくないっぽいんだよな、戦場ヶ原は。

むしろそういう行為 자체が、ツンデレ、というかツンドロっぽく見せてしまつてゐるような気がする

んだけど、それは僕の気のせいなのだろうか。

それはともかく。

そう、戦場ヶ原といえば神原後輩。

神原と月火ちゃんは、僕の知らない間にいつの間にか仲がよくなつていて——当然、変な意味ではなく、普通に、だけれど。

今のところは。

多分。

ええと——

火憐ちゃんが神原に紹介して、何度か会つているうちにそうなつてしまつたらしい。しかしまあ、神原に関しては色々な意味で予想済みだつたりして色々警戒もしていたのだけれど、思わぬ伏兵というか、なんというか……うーん、戦場ヶ原がなあ。どうも女の子に関しては危つかしいところがあるみたいだから——神原と同類というか神原の師匠というか。

神原もそうだけど、あいつらどこまで本気なんだか——

羽川がやたら心配してたし。

別に、いいけどさ。

いいや、よくない。

しかし、なんで羽川がそんなことを知ってるんだろう。まさか、あいつらに変なことされてないよな。

少なくとも戦場ヶ原は、一時期、僕に羽川の胸のことをやたら自慢してたんだよな。なんでお前が自慢するんだよ的な感じで、思わずぶりに。

羽川のあの事件のとき、戦場ヶ原が色々してくれたからなあ。ついでに色々しちゃつたのかなあ。あの件に関しては、羽川も戦場ヶ原もやたら仲良く共同戦線を張つて、あまり教えてくれないからなあ。

うーん。

うーん……。

それだけならともかく……少しずつ、周辺に悪い影響が出始めてるし。

神原と戦場ヶ原の影響。

戦場ヶ原と神原の悪影響。

あいつら——戦場ヶ原と神原つて、ヴァルハラコ

ンビジやなくて、悪腹コンビジやねえのか……。つて、ちょっと語呂がよかつたから思わずルビまで振っちゃつた（そんな言葉は存在しない）けれど。
で、その、具体的な悪影響というのは、なんといふか——必要な、必要以上のスキンシップというか。

千石の場合はなんだか嬉しそうにキヤツキヤウフ（千石はウフフとしか言わないけれど）とされて、いるから別にいいのかもしれないが、八九寺へのスキンシップはもう完全にセクハラだつたからな！

後から八九寺に「さ、さすがアレラギさん兄妹です。まさか妹さんから、同性からセクハラを受けるとは思つてもいませんでしたよ！」なんて言われたし。

最近はそれを知った忍が、八九寺Pの横暴にファイヤーシステーズを利用して抵抗してるらしく、もう、わけのわからないことになつてしまつていて。忍も直接抵抗すればいいのになあ。そんな忍は八九寺Pから酷使されているみたいで、ここ数日見かけてい

ない。まあ、忍を見かけないのはそれだけの理由じやないんだけど。どうも新しい部屋と相性が悪いといふか、なんというか……。しかしあいづら、一体どんな仕事をやつてんだか。ていうか見た目でいつたら労働基準法に抵触するような気がするんだけど、忍は五百歳越えるからなあ、つうか六百歳近いし——「お前様は儂に言つてくれたじやろう、お前が明日死ぬのなら僕の命は明日まででいいと！」ツーテイルの小娘の陰謀から助けてくれ！ それかそうじやのう。ミスターードーナツに連れて行つてくれれば助かるかもしけぬ」なんて必死に言つていたけれど、八九寺Pもそこまで酷いことはしないだろう。ということで放つておくことにした。事実ミスターードーナツに連れていいくとコロッと機嫌が直るしな。それはともかく、だ。

長々と回想をしてしまつたけど、何の話だっけか。

ああ、戦場ヶ原が用事があるから来れないと話だつたつけ。

「——いや、まあ色々あつてなあ」「まさか妹達に、彼女と一緒に布団で微睡んでいただなんて、そんな状況を説明できるわけもなく。曖昧な僕の返答と、妙に長い回想をしてしまつていた微妙な間に、月火ちゃんは何を勘違いしたのかかしげた首を戻し、神妙な表情で、

「……ああ、お兄ちゃん。浮氣だね、それ」なんて、珍妙なことを言い出す。

火憐ちゃんも、「……ああ、兄ちゃん。浮氣だな、それ」だなんて、……奇妙なことを……。

「は、は、はつはつは、そ、そんなわけないだろ」——だつて僕達はもう……お前ら子供にはわからぬい関係なんだぜ。だつてあいつ、一人きりのときの甘え方つていつたら……とくにここ数日は——昨晩だつて、朝までだぜ。ふつふつぶ。

「お兄ちゃんのその自信つて、どこからくるんだろうね。だつてさ、戦場ヶ原さんつてすつごい美人じ

やない？ 学校ではクールビューティーとか深窓の

令嬢なんて言われてたんでしょ？ 大体、そもそも
なんでお兄ちゃんなんだろう」

「う。

「そうだぞ兄ちゃん。ていうか、なんで兄ちゃんの
まわりには美人しか居ないんだ？ 翼さんといい、
神原先生といい——」

「だ・か・ら」

「まあ。と、笑みを浮かべながら月火ちゃんが言
つた。

「まあ、浮気だな」

それを受けて、得意顔の火憐ちゃんが言つた。

「んがあ、やめてくれ！」

そりゃあ、あいつと僕が釣り合わないなんてこと

は重々承知している。僕が一番よくわかつてるんだけ
よ！ お前ら僕の唯一の幸せまで弄もてあそぶのはやめて
くれ！ 実際、あいつモテてモテて心配で心配で仕
方ないんだよ……。

あんなに愛しあつたにもかかわらず。

昨夜も朝まで果てしなく交じわつた僕達なのに。
僕は果てもなく心配になつてしまふ。

僕、こんなに疑り深い性格だったかなあ……。こ
れまでにそんな描写、一度もなかつたよね。

「本当、お兄ちゃん面白いなあ」

「うそだようそ。ああ見えて戦場ヶ原さん、兄ち
やんにベタ惚れだもんなあ」

「つか、ああ見えてもつて。

「そ、そろか？」

「ま、そうだね。妬けちゃうくらい、すごくツンツ
ンしてるように見えるけど、そう見せてるけど、怖
いくらいにお兄ちゃん一筋つて感じ」

ジト目なのに鋭い月火ちゃん。
むしろ月火ちゃんが怖いって。

しかし、戦場ヶ原が怖いくらい——というのは同
感だつた。無論、一時期ほどの危うさは無くなつて
いるのだけれど——

情の深い女。

やはり、そこは変わつていなかつた。でも、僕だつて戦場ヶ原一筋だけどな。怖いくらいかと言われると、ちよつとわからないが。

「ていうか兄ちゃん、家から学校通えばいいのにさ。ちよつと寂しいぜ」

火憐ちゃんは突然、話題を変える。

「いやあ。それはないでしよう」

につしつし。とでも言いだし、その表情で、月火ちゃんが言つた。

「ええ、なんでだよう」

火憐ちゃんが首をかしげる。

「ねえ、お兄ちゃん」

んつふつふ。とでも言いだしそうな表情で、月火ちゃんが言つた。

「あ！ ああっ、そうだな！」

火憐ちゃんも気付いたみたいだつた。

につしつし。んつふつふ。と、左右からステレオ

で。いや、サラウンドで。僕のまわりをぐるぐる回りながら、3Dではやしたてる。

でも、それでも、やつぱり嬉しい。

でも、それでも、やつぱり嬉しい。

羽川と戦場ヶ原のおかげで、なんとか進学することができた僕（勿論、戦場ヶ原と同じ大学だ。かなり危ないところではあつたけど）は、実家を出て学校の近くに部屋を借りることになつたのだつた。一人暮らしは憧れていたし、学校が家からちよつと距離があるのと、親がいい機会だからと家を出るのに賛成してくれて——色々と援助をしてくれたのである。久しぶりに親に無理を言つたような、甘えてしまつたような、本当に、そんな気がする。

新しい部屋はいささか古いけれど趣のある——と いうか味のある、いかにも昭和な感じで、風呂も付いているし、なんだかやたらと収納が広い造りだつた。収納だけでなく、部屋数も一人で住むにはちょっと多いくらいの、僕なんかが住むには随分と贅沢

なもので、その割に家賃は格安という、滅多にない掘り出しものだつたらしい。こういう所は田舎ならではなのだろう。

引っ越してきて、もう五日。

部屋の隅に置いたままのダンボールも片付けなきやなあと思いつつ。

生活に必要な最低限の道具はすぐに揃えたのだけど、細々としたものは忘れてしまうものだし、なければないで、なんとかなつてしまふので、いい加減そろそろ、きちんと揃えてしまいなさいな。なんて促されるまでは、なかなか買いに行くタイミングが作れなかつたのだ。

ていうか、なんていうか、それだけじゃなく、ちよつとした個人的な理由もあつて。

で、今日は細々としたものの買い出しというか、データに出掛けるはずだつたのに。

そんなことを言つた当の本人、戦場ヶ原が急用で行けなくなつてしまつたから、その代わりに、と言

つては悪いな。まあ、荷物持ちとして、妹達が僕のまわりで騒がしくしている——と、いうわけなのだつた。

ちなみに、戦場ヶ原はどさくさで、ほとんどずつと僕の部屋に一緒に居る。半分同棲みたいな状態になつてしまつていた。引っ越しやらなにやらを色々手伝つてくれてから——

そのついでみたいに。

自然に。

当然のように。

このあたりは昔から変わらない戦場ヶ原なのだつた。もつとも、まだ引っ越したばかりだから同棲なんていつても、ちよつとしたお泊まりみたいな感覚だし、そもそも、毎日のようく遊びにくる妹達の手前、本当にずっと一緒に居られるわけではなかつたのである。大体、僕が民倉荘に泊まつた日数の方がよっぽど多いくらい（本当は民倉荘には泊まらない約束をしていたのだけれど、なんだかんだと、結果

的には線引きをした上で泊まることが何度もあつて——線引きも微妙になりがちだつたけど……）だし。でも「今日、泊まつてもいいかしら？」なんて、ちよつと恥ずかしがりながら、僕に確認する戦場ヶ原は民倉荘では見られなかつたから、やはり今までとは違う感覚ではあり——ま、確認するもなにも、大きなバッグにお泊まり道具を持つてきたりするのが戦場ヶ原らしいというか、なんというか。

そんな戦場ヶ原との甘い生活は、火憐ちゃんと月火ちゃんには、瞬く間にバレてしまつていた。

折角、戦場ヶ原が一生懸命、お泊まりなんてしていませんよアピールをしていたのに、清い交際をしていますよアピールをしていたのに。

僕は別にいざれバレる話なんだし、そんなことしないでいいよと言つていたのだが、戦場ヶ原は半分意地になつてやつてたつていうか……。

わかりやすいところでは、夕方、わざわざ妹達と一緒に帰り、一旦民倉荘に戻つてから、また僕の部

屋に来たりとか、ツンデレを氣取つて僕に対してツンツンしたりとか……その他にも色々、細かい工作を、涙ぐましい努力をしていたのだけれど——結果、あつけなく、失敗をした。

例の詰めの甘さ。

ベタさ加減。

さすが、バナナの皮で足を滑らす女。

それは、わかりやすい失敗だつた。

洗面所の二本の歯ブラシを、妹達に見つけられたのだ。

無論、妹達には散々、色々と茶化されたのだが——いずれにせよ、こいつらには隠しようもないしな。

それにしても、歯ブラシを買つて、洗面台のコップに入れたときの戦場ヶ原は、やたらとニヤニヤして、一人くねくねしながら照れてたりしていた（こんな戦場ヶ原は初めて見た）のが印象的で——勿論、僕も嬉しかつたりはしたのだけれど、その戦場ヶ原

の表情とふるまいを見ていると、こつちの方が嬉しぇずかしくなつてしまつたといふか、こそばゆくなつてしまつたといふか。

しかし歯ブラシの件が妹達にバレたときの戦場ヶ原の慌て方、ヘコミ方は、本当に可哀想なくらいだつた。ちょっと幸せな気分になりたかつただけなのに、こんな失態——昔の私からしたら信じられないミスだわ。いえ、昔の私なら敢えてやつたかもしれないけれど。ああ、火憐さん月火さんへの私のイメージが……。

そんなことを言いながら。

頭をかかえながら。

戦場ヶ原はくずおれるのだつた。

「つーかお前、イメージとか氣にしてたんだな」

まあ、月火ちゃんなんかは、そんなにイメージ変わつてないと思うけれど。

戦場ヶ原は、半分涙目になつて言う。

「当たり前でしょ。あなたの彼女は、しつかりし

た、クールビューティーなお姉さんなんだから「……自分で言うなや」

なんて感じで。

まだ、お泊まりの延長の半同棲みたいなもんだからいいと思うけれど、本当に同棲するようになつたら、ちゃんと戦場ヶ原のお父さんにも挨拶をしに行かないといけないんだろうなあ。

ていうか、うちの親にだつてなんて言つたらいいんだろう。

ま、同棲もなにも、引っ越して五日目だ。そんなことはまだ考えないで、いいよね?

……はあ。

なぜかため息。

そういうえば付き合い始めた頃、戦場ヶ原に言われたつけ。ため息すると幸せが逃げていくわよ——みたいなことを。

「なにお兄ちゃん、ため息なんてついてるの」さすが鋭い月火ちゃん。すぐに気付かれる。

「ん、いやな」

「大丈夫だよ、兄ちゃん。戦場ヶ原さんのことばはパ

パとママには黙つておくからさ」

「うんうん。そんな簡単にバラしたりしないつて」

「なんか嫌な言い方だな」

「搾れるだけ絞つてからだよ」

「最悪だ！」

「更にあたしは物理的に絞つてやるな！」

「勘弁して！」

つうかこいつ、技を思い付いたらまず僕で試すの

止めてくれないかな。僕がこんな体質じやなかつたら、本当に大怪我してるとと思うのだが。

「あ、そういえば」

いきなり、火憐ちゃんが何かを思い付いたように言つた。

「そういえば？」

月火ちゃんが絶妙なタイミングで、合わせるようになつて訊ねる。この阿吽の呼吸は流石ファイヤーシステ

ーズ。真似できない領域だろう。

「野球のスクイズつて搾るつて意味なんだぜ」

「へえ」

「ほう。存じませんでした。言われてみればそうか。でも、思わず関心してしまう。

「うんうん、そりゃ。火憐ちゃんも月火ちゃんほどじやないにせよ、最初は賢いというか、僕なんかと違つて出来る子つてキャラ設定だつたもんな。うんうん、その調子だ。今の路線は、あんまりにもアレだからさ

」「へええ。なるほど、言われてみればだねえ

「ほう、月火ちゃんも知らなかつたみたいだ。

「つふつふん」

得意顔の火憐ちゃん。このあたりは師匠筋の神原後輩や戦場ヶ原と似てきててしまつていて。

「ちよつと心配。

「なんで野球にクイズが必要なんだろうなあつて気になつて調べたんだ。ていうか醉クイズ？ それと

も素のクイズ？ つて——ええと、まあ、それだけなんだけどな」

.....。

「オチとかちゃんと考え方とけや！」

大体なんだよ醉クイズつて。わかりにくすぎるわ。

ていうか意味わかんないだろ。

.....やつぱり火憐ちゃんの賢い路線？ への

変更は無理のようだった。

いいよいよ。

火憐ちゃんは火憐ちゃんで、いいところは一杯あ

るんだから！

つうか、キヤラは立つてるしな。

うん。

そんな火憐ちゃん月火ちゃんと、いつもの下らない馬鹿話をしていると——気付けば僕達は、近所のホームセンターに辿り着いていたのだった。

雑貨屋さんや百円ショップでもいいのだけれど、

ここは近いし安いし、わりとちゃんとしたもののが色

々と揃うから。あと、テンション上がるんだよな、ホームセンターって。なんでだろう。これは戦場ヶ原も言つてたから、僕だけじゃないと思うのだけど。ちなみに、忍は基本的にあまり興味がないようだつた。あいつはドーナツがないとな。

広い駐車場を歩き、オープンテラスのような入口から内部に入る。なんだかちょっとお洒落な作りだつたりするこのホームセンターは、色々な催し物をやつていたり、所謂ホームセンター的ではない、女の子が喜びそうなテナントも入つていて、娯楽施設の少ない田舎にはちよつとしたデートスポットになるようなところだった。

実際、何度か高校生の頃にも戦場ヶ原と来たことがあって——まあ、戦場ヶ原がまだまだお茶目だった頃は、工具コーナーが恐怖でしかなかつたのだけれど——

「あら。この工具は——文房具よりも、随分と甚振り甲斐がありそうね」

例の、無表情で。

例の、クールな声で。

「いやいや！ さ、さすが、戦場ヶ原さん、お目が高い！ でも、そんな工具より、ほら、あっちの女の子らしいものを見ましょうよ。あー、ほらほら、キッチンコーナーとかさ」

「はつ、興味ないわね。いえ……そういういえば、ピーラーもそろそろ、阿良々木くんの皮を剥きすぎて切れ味が悪くなつてきちゃつたから、後でそつちも見てみようかしら」

……キッチンコーナーも危険だつた。

包丁とかナイフじゃなくて、あえてピーラーを選

ぶところが戦場ヶ原らしいよな。なんて、妙な感心をしたのを思い出してしまう。

「それより、これ、ちょっとでいいから試させてくれないかしら？」

目をキラキラとさせて。

「それはマジやばいって。死んじやうつて！」

「ふん、不死身のくせに頼りないわね——ええとね、一応、言つておくけれど、冗談よ。冗談だからね」

——的な。

きつと余所目から見たら、バカツップルだと思われるくらいにベタベタとしながら。この頃——その、今みたいな関係になるちょっと前、スキンシップへの抵抗が薄れてきたのか、僕を信頼してくれるようになつたのか、やたらと戦場ヶ原は、僕にくつついてくるようになつたんだよな。会話の内容は相変わらずだつたのだけれど——

今思えば、あれはあれで？ 甘えて？ くれていたのだが。

そんなことを思い出しながら、工具コーナーをなんとなく無意識に早足に通り過ぎ、キッチン道具コーナーに入る。その途端、火憐ちゃんが「兄ちゃんこの鍋いいな。買おうぜ！ カレーだ！ カレーだぜ！」なんて言つてはしゃぐ。

子供か。

居るよなあ。

こういう所に来ると、急にテンション上がつちゃう子供。

ふ、大人の僕としては、冷静に奢めておかなればなるまい。

「こんな業務用の給食室にあるような大きな鍋、どこに置けばいいんだよ！」

「いや、でも、大量にカレー作れるぞ？」

「大勢でキャンプするわけじゃないんだよ！」

「いや！ 大量に作るとカレーは旨いんだ！」

「なあ火憐ちゃん。これな……」

火憐ちゃんは目を輝かせながら僕の台詞をさえぎり、切れ気味で言う。

「なんだ兄ちゃん食えないのか！ ならあたし一人で食うからいいよ！」

「いやな火憐ちゃん……」

「うーん、これがあれば、あたしもカレーの妖精に会えるかもしねしないな」

興奮状態の火憐ちゃんと会話を成立させることは、最早不可能だつた。なんだカレーの妖精つて。どんな要請があれば出てくるんだよ。

月火ちゃんはそれを見て笑いながら「あはは。ちよつとあつちの方見てくる」なんて言い、すぐに僕達から離れてしまう。

逃げられた。

……そりやまあ、恥ずかしいよな。

「火憐ちゃんは行かないのか？」

月火ちゃんの声のせいか、我に返り、少し落ち着いてきた火憐ちゃんに声をかける。

「いやあ、あたしは、この大きな鍋が」「鍋はもういいから！」

なんでそんなに食い付いてるんだよ。

「……見てるのはいいけど、壊すなよ」

「ああ、大丈夫だよ兄ちゃん。愛しの鍋だから、壊したりしない」

なんだか妙に芝居がかつた口調で言われてしまう。

もう埒らちが明かないでの、愛しの鍋の前から動かない火憐ちゃんを置いて、家庭用のキッチン道具を見ることにした。テフロン加工のフライパンと、そこそこの鍋を買い物カゴに入れる。幸いガスを使える部屋だつた（むしろ、電気コンロやIHしか使えない部屋があること 자체を知らなかつた）ので、ちよつといものを買うつもりだつた。

最近、戦場ヶ原の料理の腕がめきめきと上がつていて、どうしても奮発していいものが欲しくなつてしまふのだ。あいつ、進学は推薦だつたから、冬の間ずっと暇で料理ばかりしていたらしくて、会うたびに、振る舞つてくれる料理が美味しくなつているのがわかるくらいだつたから。「べ、別に阿良々木くんに、美味しいものを食べてもらいたいつてわけじやないんだからねつ」とか、そんな本氣なんだか冗談なんだかよくわからない棒読み台詞を、照れながら言つていたことをよく覚えている。

だからこそ、あまり炊事関係の道具を積極的に買

う気になれなかつたというか。他人からはよくわからぬかもしれないが、その、自分で葛藤みたいなものがあつて、戦場ヶ原に催促しているみたいにな形になつてしまふと、なんというか、照れくさいというか。そんな複雑な嬉し恥ずかしい悩みもあつて、なかなか買いに来れなかつたのだ。自分からは言い出しにくかつたのだ。

そんなことをニヤニヤと思い出していると、急に買い物カゴが重くなる。

数本の、いや、数種類のバールと一緒に月火ちゃんが戻つてきた。

ああ、バールつてサイズとか色々あるんだなあ。ほほう、と。

関心してしまう。

ああ、完全に月火ちゃんといえばバールつてイメージが付いちやつたよなあ。

別に戦場ヶ原のホツチキスみたいに、何にかかつてるわけじやないのに。

いやいや。
ていうか。

「んなもん無造作に買い物カゴに入れるなや！」

業務用愛しの鍋に飽きたのか、いつの間にか近くに居た火憐ちゃんが爆笑する。

「あははは！ 月火ちゃんつてば、なに持つてきてるんだよ」

「いや、やつぱりバールは必需品だから」

真面目な顔で言う。

「意味がわからんねえよ！ 必要ないから！ 返してきなさい！」

「なんでよ。暴漢が来たら武器が必要でしょ！」

「僕の部屋はどんだけ物騒なんだよ！ バールのど

こが必需品なんだよ」

こんな田舎にそんな暴漢が居るか！

どこの世紀末だよ。もう、月火ちゃんが一番物騒

だよ！ えーと、月火ちゃんつて賢い設定じやなかつたか？ どこでこんな残念な子になつちやつたん

だろう……。

「じゃあいいよ。私が買うから」

「ああ、お前が買うならいいよ」

ふんふんしながら、自分で買い物カゴを持つてくる月火ちゃん。

月火ちゃんは、まるでお菓子でも扱うような自然な所作で、バールを僕の買い物カゴから自分で持つてきた買い物カゴへ移動させている。

「え、本気で買うの？」

そんな月火ちゃんを見て、僕も火憐ちゃんも、ちよつと、素で引いてしまうのだった。

002

買い物からの帰り道。

国道から奥に入つた住宅街。

電柱、電線、マンホール。

道路標識、一方通行。

制限速度20キロ。

止まれの道路表示がある、交差点。

ブロック塀で囲まれた住宅が並ぶ、長細い裏道。

なんでもない帰り道。

大きなリュックサック。

見慣れたツインテイル。

本能のままに（妹達と一緒にいることも忘れ）、

いつものように正面に見えるその小さな愛らしい身

体に飛び付こうとすると、僕は視界の横にあつたはずのブロック塀に激突していた。驚愕と、激痛が始

まる前の鈍い痛みの中、しばらくその意味が、なぜ

僕ではなく、火憐ちゃんがリュックサックに凄い勢

いで向かつてているのかをなかなか理解できなかつた

が――

思いもよらぬところで、僕の嫌いだった物理が役に立つ。

「きやーっ！」
くそつ。僕の生き甲斐を取りやがつて！ 邪魔しやがつて！ 忍だけじやなく火憐ちゃんもかよ！

羽川と戦場ヶ原のおかげである。

ビリヤードの玉と玉が衝突するように、火憐ちゃんが僕の後から僕を斜めに突き飛ばし、その女の子に飛び付いていたのだ。

単純な物理法則である。

僕が吸血鬼そのものだつたら、こんな下らない物理法則なんて無視してやつたのに。ブロック塀に貼り付きながら、その冷たさと表面のざらざら感を、

そこから発生した激痛に耐えながら思う。

「真宵ちゃんだつ」

火憐ちゃんが、八九寺を捕まえていた。

捕獲。

確保。

絡めとるように。

逃げられないように。

「きやーっ！」

まさか妹からこんな仕打ちを受けるだなんて……。

——ていうか、そんなところ触つてんなや！

どんなセクハラだよ！

犯罪だろ、それ！

——ていうか、八九寺つてこんなところにも居るんだな。

今回の引っ越しで、僕が、唯一気になっていたことだつた。本当、僕の方から会いに行こうと思つたのに。

——ていうか、僕の八九寺が妹達に挟まれてるんですけど。

「真宵ちゃん、忍ちゃんはどうしたんだよお」

おい、火憐ちゃん。手加減してやらないと、お前が本気でじやれついたら、八九寺なんて簡単に死んじやうんだからな。

つてまあ、もう死んじやつているのだけれど。

「あまり忍ちゃん、いじめちゃ駄目だよ」

月火ちゃんは月火ちゃんで、八九寺の柔らかなほ

つペをぷにぷにしながら遊んでいる。

——ていうか、壁に激突したまま痛みに耐えている僕のことは無視ですか。ファイヤーシスターズの方々は。

「きやーつ!? わ、わ、わかりました。だ、大丈夫です！ いじめてませんよ！ ああ、駄目です！」

そんなところ触らないでください！ きやーつ!? きやーつ!?

なんだ、このキヤツキヤウフフ空間。

例の体質により、ブロック塀に激突した痛みが消えてきた頃だつた。いつまでブロック塀にくつついてるんだよ！ 的な突つ込みが来ないので、一人寂しくブロック塀から離れると、

「ていうか、あーららららさん」

八九寺は助けを求めるように、僕の顔を見てから、絶妙の間でいつものように言うのだつた。

つうか、助けを求めながらもネタを忘れない八九

寺さん素敵！

「なんで僕の名前のところだけ『やつて！』とーらい』のナレーションみたいに、人を小馬鹿にしたような口調になるんだよ。わかりにくすぎるだろ。なんだか、僕が失敗した酷い料理みたいじゃないか」しかも微妙に声色まで似てるのが腹が立つ。戦場ヶ原の僕の声真似なんか、話にならないくらい上手いじやねえか。ま、戦場ヶ原は声真似上手くないけれどな。中の人凄いのに。

「失礼。囁きました」

「違う、わざとだ……」

「囁きまみた」

「わざとじやない!?」

「神谷見た？」

「なんでここで僕の中の人のことが？」

「いえ。キン肉マンの方です」

「せめてシティーハンターとか言つてくれよ」

「北斗の拳とかな。」

「本来ならばコナンネタにすべきでしようが、ちょ

つと触れづらいですかねえ」

「触れづらいなら、コナンとか、具体的なタイトル出してるんじゃねえよ」

「いえ、何を言つているのですか、阿良々木さん。わたしが言つているのは未来少年の方ですよ」

.....

「そつちのコナンに神谷明は出てねえよ！ わかりにくいよ！ お前何歳だよ！ そんなネタ、誰もわかんねえだろ！」

——ついていてる僕も僕だけどな。

「そうですか。でも、今時ウイキペディアでも見れば、そのあたりの知識はなんとかなりますし」「つうかウイキペディアがネタ元かよ。でも、なんか今時だな。ん、てか、お前そういうの、ＩＴ系は苦手なんじやなかつたつけ？」

「いえいえ。今時ウイキペディアくらい使いこなせないと。ああ、ウイキペディアといえばですよ、阿良々木さん」

「ん？」

「ジミー・ウエールズって、全然地味じゃないです
よね。なんなんでしょう、あのドヤ顔」

「別に地味だからジミーってわけじやねえからな。
それに、あれはドヤ顔っていうよりも、無駄にいい
表情だろ。つうか、そのネタはもう時期外れだ。い
つからダラダラ書いてるかバレるから、そういう中
途半端な時事ネタは止めろ！」

「どんだけ筆が遅いんだよ。

「そうですか。では、ええと。失敗した料理みたい
というのいい表現だと思いますよ。まあ、失敗作
という意味では、阿良々木さんもあまり変わりない
ですし」

「なんでそこに戻るんだよ！ わざわざ中途半端な時
事ネタを使ったのに、ここまで振りは一切無視な
のか？」 ていうか僕、何気に酷いこと言われてる？」「
思わずギヤフンと言いつきになるくらい。うーん、
僕もそれなりに更生しているような気はするんだけど

「どなあ。

「おお、真宵ちゃんいいこと言うな
僕達のいつものやりとりを、あっけにとられながら
眺めていた火憐ちゃんが関心する。

「うんうん。本当、真宵ちゃんいいこと言うね。も
つと言つてやつてよ。でも、声優さんのネタは全然
わかんないけどね——井口裕香」

同じく、ぽかーんとした顔をしていた月火ちゃん
まで、ここぞとばかりに。ていうか、声優ネタがわ
かんないからつて、台詞に無理矢理個人名とか入れ
んなや。

ふふん。と、ジミー・ウエールズばりのいい顔を見せてから、八九寺は言う。
「阿良々木さん。今日は、戦場ヶ原さん居られない
のですね」

「なんでお前ら、戦場ヶ原のことばつかりなんだ
よ」

「やはり、主人公のことは気になりますからねえ」

一応、この話は僕が主人公だつたような気がするんだけど……そういえば、戦場ヶ原にも奴隸公なんて言われたこともあつたし、このネタにあまり深入りするのは止めておこう。

話題を変える。

「てか、お前こそ、忍はどうしたんだ？」

「ああ、忍さんはですね、いま地方……といいましても、ここもかなりの地方ですが、ええと、地方でどき回りをされています」

.....

「なにてめえ、忍にそんな売れぬ芸人みたいなことさせてんだよ！」

「いえいえ。忍さんの場合はこれからですかね。

そういうネガティブな感じではないのです。アйドルの登竜門ですよ？ 会場は大入りですし。これまでわたしが手掛けってきた中では一番の感触ですね。最悪なケースでは、会場にお客さんが一人も居ないなんてこともあるのですから」

「おお、すごいな忍ちゃん。うーん、サイン貰つとこうかな」

火憐ちゃんがオーバーリアクションで関心している。

「写真、今のうち一杯取らせてもらおうよ。友達に自慢できるよ」

月火ちゃんがはしゃぎながら、火憐ちゃんに言う。意外とこいつ、ミーハーなんだな。

「てか、お前らの設定が、もう、よくわかんなくなってきたんだけどさ」

つうか八九寺って、どんだけキヤリアあるんだよ。

「設定とか言わないでください！」

「お前が言うなや！ ——でもまあ、あいつも頑張つてるならいいんじやないか。つうかギャラ上げてやつてくれよ。なんで毎回、僕がミスターードーナツで奢つてるんだか」

「阿良々木さん。うちの事務所は、売れるまでは確かにそれなりのギャラですけど、そこまでは悪くは

ないです。それに、それはギャラ「云々の話じやありませんよ」

「そうだぞ、兄ちゃん」

「そうだよ、お兄ちゃん」

この場に居る女の子達（まあ子供と妹だが）に、

満場一致で責められてしまう。

「まつたく、これだからアララーアさんは。はあ」

「しようがないか、兄ちゃんだし」

「しようがないね、お兄ちゃんだし」

.....。

「え、なんでそんなに責められてるの？ なんでそ

んなに諦められてるの？ 僕に更生？ のチャンス

をくれないの？ や、よくわからんないけど。ええ

と、なんだか雰囲気に流れちゃつたけど、僕の名前をマケドニア軍のかけ声みたいに言うな！」

「失礼、借りました」

「え、何を？」

「あなたの家の床下を」

「アリエッティ!?」

なんか、新しいパターンだな。

「皆さんは、ジブリ作品ではどの作品が一番お好きですか？」

くつ、こいつ——これまでの流れを一切無視して、当然のごとく強引にジブリネタで進行しようとしてやがる。ゴーリングマイウエイにも程があるだろ。

いくら道に憑いていたとはいえ。

しかし、こんなところは、さすが敏腕、いやさ剛腕Pといったところか。

「紅の豚だぜ。ポルコが格好いいからな」

「私も、紅の豚かなあ」

こいつら渋いんだよなあ。世代的には普通、ポニヨとか、千と千尋あたりだと思うんだけど。

僕なんか、紅の豚の良さなんて、しばらくわからなかつたぞ。

しかし火憐ちゃんと月火ちゃんは、飽きもせらずよく見てたからなあ、紅の豚。ビデオに録つてあると、

なんとなく暇なときに見ちゃうんだよね。ちょっと古いテープなんかだと、懐かしいCMを飛ばさないで見たりして。そういう刷り込み的なものも大きいのだろう。

もつとも、今時ビデオもないか。

「阿良々木さんは、どの作品ですか？」

「難しいな。僕は、カリオストロの城が好きなんだけど」

ルパン、かつこいいしな。勿論、錢形も。

でも、なんとなく、あの伯爵^{はくしゃく}に親近感を抱いてしまうのはなぜだろう。

ちなみに、戦場ヶ原はカリオストロもかなり見たらしいけど、一番好きなのは原作のナウシカなんだそうだ。ナウシカの性格がいいとかで。

ふふつ、すごいわよ。なんて勧められたから、僕

も原作を読んでみたのだけれど、確かに、本当にすごかつた。絶句するレベルで。映画版しか見てない人には、あれは結構キツいつて。

まあ、戦場ヶ原らしいといえば、戦場ヶ原らしいのだが……。

ちなみに、羽川も原作のナウシカが好きなんだそうだ……。あと、原作はクロトワもいいよね。なんて言つてたつけなあ。

うーん、女の子ってわからない。あいつらが特殊なんだろうか。

「カリオストロは、ジブリではないですからねえ。いい作品なのですが」

八九寺はちょっと考えてから、微妙にいい表情で言つた。

「そうなんだよ」

「へえ、そうなんだ。カリオストロの城かあ。ええと、確か、スペゲッティが旨いって話だよな」

「いや、違うから」
僕は間髪^{かんぱつ}いれずに、突っ込んだ。

あの作品をそんな風に要約しちゃったのは、火憐ちゃんが初めてだと思うぞ。もつとわかりやすい、

印象的なシーンはたくさんあるのに！

「確かに、監督はジブリ作品の人だけど、ジブリではないんだよね」

「あ。と僕が嘆息たんそくしていると、なかなかいい発言

が。意外と、中途半端にだけど詳しい月火ちゃん。

「しかしですよ、阿良々木さん。床下に小人が居るつて、ジブリキヤラだからまだ絵になりますが、リアルだつたり……そうですね、例えばアメコミ調の

絵だつたりしたら、相當に引くシチュエーションですよね」

またアリエッティかよ。カリオストロの話はもう

終わりなの？

とはいって、古い作品のことばかりを論じていても仕方がない。新しい作品にも目を向けていかねばならないのだろう。

だからまた、僕もアリエッティの話に戻る。

「そんなん軽くホラーだろ。ていうか、女の子が床

下に住んでる時点で」

可愛かつたら歓迎するかもしれないが。いや、可愛くってもホラーはホラーだよな。

「別に住んでるのは女の子だけじゃないよ、お兄ちゃん」

「そうだぞ。マッチョも住んでるかもしれないぜ」

「どんだけ嫌な想像してるんだよ、お前ら」

「さすが阿良々木さんです。女の子以外は、即拒否ですね」

「僕のイメージを下げるような言い方は止めろ」

「お兄ちゃんのイメージつて、これ以上下がりようがないよね」

なんでジブリネタから、アリエッティから、心温まるハートフルな話題から、僕のイメージを下げる話になるんだろう。

うーん、しかも、このネタも微妙に時期を外してしまつてるような気がする……。

ま、いいか。

個々の作品ではなく、ジブリ全体のネタと思えば、

時事ネタというわけでもないしな。うん。

「それにしてもですよ、阿良々木さん」

話題を変えるように、八九寺はちょっと眞面目な表情になる。

「ん、なんだよ」

「あまり、忍さんいじめちゃ駄目ですよ」

.....。

また僕のイメージを下げるようなことを。

「地方に飛ばしたりとか、半端ないいじめをしてる

張本人に言われたくねえよ！」

「わたしはいじめてません。お仕事です」

「うわ、こいつすげえ。言い切つたわ。

「別に、わたしがメインのお話で、大半の美味しいところを持つていかれた件の意趣返しなどではないですよ」

——怯えているというか。

今は小学生の子供に地方に飛ばされてしまうくらいの力しかない（とはいえたが八九寺は敏腕、剛腕Pだからなあ）が、最強の怪異、怪異喰いとして頂点を

「まあな。僕だつて忍のこと、いじめるわけないだろう」

「それは、わかつておりますが。でも、だつて忍さん、行きたがらないじやないです。阿良々木さんの新しい部屋に」

.....。

そうなのだ。

忍と新しい部屋とは相性が悪いというか、忍がやたらと入りたがらない、というより近寄りたがらないのだ。最初、僕と戦場ヶ原に気を遣つてくれているのかとも思ったのだけれど、どうも、そういう雰囲気ではなかつたし。

「それを言わなきゃ仕事熱心なPとして尊敬できたかもしれないのに！」

「勿論、冗談ですが」

極めた、あの忍が……。

だから、怯えているというより、相性みたいなものがあるのだろう。例えば例の神社と神原のように。と、僕は解釈していたのだけれど——むしろ、あの部屋に何かがあるのかと思つて（ちょっと古いとはいえ、やたら広い割に家賃が安かつたし）、逆に部屋の方を心配したくらいだつたのに。

でも、あらためて八九寺からも言われてしまふと、やつぱり気になつてしまふ。

「うーん。何でだろうなあ。おまえら、なんか、忍のことで心当たりないか？ なんでも、どんな些細なことでもいいんだけど」

「ううん、なんだろう。相変わらず、金髪がふわふわで綺麗だなあとか？ いつも触らせてもらうけど、本当に気持ちいいんだよね」

月火ちゃんが、うつとりとした顔で言う。こいつ、ついでにセクハラしてないだろなあ……。

「ううん、なんだろ。相変わらず、絆創膏貼つて

るんだなあとか？ いつも見ようとすると、本氣で逃げるんだよね」

火憐ちゃんが、うつとりとした顔で言う。これはもう、セクハラだよね？

「なんか代わり映えしないな。いつものことじやないか」

ひょつとして、こんないつもの生活が嫌になつたんじやないか、忍は。

戦場ヶ原とも仲が悪いわけじゃないしなあ。ついうか、むしろ仲が良すぎるくらいだし。

無論、こいつらはこいつらで、それなりに複雑な関係ではあるのだけれど——

「ううん、なんだろう。忍ちゃんかあ。ああ、こないだ一緒にDVDを見たとき、忍ちゃん本氣で絶叫してたけど、そのくらいかなあ？」

忍がDVDで絶叫？

あいつ最近、僕の影の中で贅沢三昧しなくなつたから、なんでブルーレイじゃないんだとか、ケーブ

ルがどうのとか、スピーカーがどうのとか、オーディオマニア的なことをぎやあぎやあ言つてたんじやないの？

「ああ、月火ちゃんと一緒に見たやつだな。あれはびっくりしたなあ。DVDの内容よりびっくりしたつていうか、忍ちゃん、あたしの膝の上に居たから、あたしも飛び上がつたぜ」

「あいつと火憐ちゃんが絶叫するつて、どんなDVDだよ」

「よくある、昔流行った和風ホラーものだよ、お兄ちゃん。忍ちゃんが一緒に見ようつて誘つてくれたんだけど」

和風ホラー？ ああ、呪怨とかリングとか、あのあたりのやつか。でも、あいつ、元とはいえ最強の吸血鬼だよ？ なんでそんなDVDで絶叫するんだか。

「あたしは忍ちゃんにびっくりしただけだつて。押し入れから、お化けが出てくるシーンだつたかな。

でも、別にいつもみたいに家のリビングで見たんだぜ。兄ちゃんの新しい部屋で見たわけじゃないし、忍ちゃんがあの部屋を嫌がるつて話とは、あまり関係ないよなあ」

「そうだよね。見終わつた後、ちょっと演出が卑怯でびっくりしたがの、まあ大して恐くなかったのう。かかか！ なんて言つて笑つてたし」

月火ちゃんが首を傾げる。

「忍ちゃん、ずっとあたしにしがみついてたけど、最後まで一緒に見たんだぜ。でも、笑顔が引きつってたようにも見えたけどな。ずっと震えてたし。しばらくあたしに抱き付いたままだつたし。めっちゃ可愛かつた」

むしろ、少し神原っぽくなつてゐる火憐ちゃんが、ちょつと心配になつてくる。

「ひよつとしたら、そのDVD、わたしがお渡したやつかもしませんね。またJホラーが流行りそうな気配があるので、なんというか、資料にと思いま

して」

「なあ、八九寺。やつぱり——お前、忍のこといじめてるんじやないか?」

まあ、それは冗談としても、忍も自分から最後まで見てるわけだしなあ。

——うーん。

忍によろしくな。と、そのくらいで僕達は別れたのだった。

——それにも部屋が寒い。

郊外の田舎町。

そのまた外れにある、この部屋。

部屋がなかなか暖まらないので、炬燵に三人、肩まで埋まっている。

勿論、八九寺も僕の部屋に誘ったんだけど、忙しいとかなんとかで丁重に断わられてしまったから。

「折角の兄妹水入らずを、お邪魔するのもなんですし。わたしも丁度用事ができましたので。ていうか、そろそろ忍さんを見に行かないといけません」

なんて。

八九寺とはまた、いつでも会えるだろうし。だから、あまり強くは誘わなかつた。以前、強引に部屋に連れ込んでしまつた反省もあるし——

だから、わりとあつさりと。

003

この地方のこの季節は、一番寒い時期は過ぎたと

はいえ、それでもまだ本当に寒いのだ。とはいっても、北海道や豪雪地帯と呼ばれるような地域ほどではないのだけれど。それゆえに暖房設備はそれほど強力ではなく、それなりの普通のもので、しかも、この部屋のエアコンはどうも調子が悪いみたいで——暖房が効かないわけじやなく、ちゃんと暖まるんだけど時間がかかるたりするときがあつて。

ちよつとむくれながら、火憐ちゃんが言つた。

だから、この部屋では炬燵が大活躍なのだ。
「月火ちゃんと炬燵は似合いすぎるなあ」

僕はしみじみと言う。小さな身体に和服姿の月火

ちゃんは、炬燵のパーツなんじやないかというくらいに、まるで炬燵布団に埋め込まれたように馴染んでいた。

「家に、炬燵なかつたのにね」

背を丸めながら、ぬくぬくと、気持ちよさそうに月火ちゃんは言つた。

そう、実家には炬燵がなかつたのだ。正確に言えば、実は僕が子供の頃、火憐ちゃんが生まれる前に古いタイプの炬燵があつたのだけれど。だから、そんな懐かしさもあって、ちょっと憧れていた僕が一番最初に買つてしまつた家電だつた。戦場ヶ原には、他に買うものがあるでしよう？ なんて呆れられたりもしたけれど。でもまあ、これだけ活躍しているのだから結果オーライなのである。

「あたしはどうなんだよ」

長い足で、僕の太ももを器用につねつてくる。
「だつてお前、そんなに寒くないだろ？」
「うん。多少寒いくらいだな。はつはつは。あたしはいつでも熱血だからな」
「その時点で似合う似合わないもないだろ」というか、派手なジャージで何言つてんだか。

「それもそうか」

「いやあ、実際火憐ちゃんは熱血だよ」「納得するのかよ」

「そりやそりだけど」「どうだ、すごいだろ」

「寒い日なんかくつついてると、本当あつたかだもん。名は体を表すつて本当だね」

「まあ、人間湯たんぽつてやつか。随分おつきいけどな」

「湯たんぽっていえば、忍ちゃんはいいぜ」

「ああ、子供は体温高いからなあ」

実際は六百歳近いけどな。

しかし、火憐ちゃんの微妙に神原っぽい発言はどうにかならんものか。

「忍ちゃんといえば、そういえばこの部屋つて、あのＤＶＤに出てきた部屋の雰囲気に似てるよね」

「そうなの？」

「ああ、そういうえば似てるな。あの押し入れとか、

「まんまだぜ」

「ふふふ、お兄ちゃん、この部屋……何か、出るかもしねないよ？」

月火ちゃんは、雰囲気を出しながら言う。和服でそんな調子で言わると、実は結構怖いかもしれない。

火憐ちゃんも、同じように。
そんなこんなで、いつもの馬鹿な話。

「そうだぞ、兄ちゃん。ほら、家賃、やたらと安い。
月火ちゃんは、いつものように、こんな風に、僕がいじられるパターンだけれど。今日のところは接待プレイというつたんだろ？ あの押し入れが勝手にすうっと開いて——」

火憐ちゃんも、真似して雰囲気を出しながら。でも、なんというか、根本的に明るすぎるからなあ、こいつは。

「小学生じゃないんだから。そんなこと、あるはずないだろ」

僕は、呆れながら言う。

大体、本物の怪異と付き合って、何度も死ぬ思いまでしてるんだぜ、僕は。

実際に、一度は死んでるしな。

「まあ、そりやそうだよね」

つまらなそうに、月火ちゃんが言つた。

「そりやそりや」

月火ちゃんは、いつもの馬鹿な話。
ターンだけれど。今日のところは接待プレイというやつだ。

部屋も暖房でいい感じに暖まってきた頃、ホーム

センターで買つたジュースとお菓子を（僕をつまみにして）食べ尽くした火憐ちゃんと月火ちゃんは、十分に満足したようで、

「じゃ、あたし達は帰るからな」

「じゃあね、お兄ちゃん」

なんて言つて、帰り支度を始めてしまう。

実家で僕の部屋に居座られているときなんかは、

さつさと帰れなんて思つていたものだが、不思議なことに、どうもここ数日はそういう感情になれなかつたのだ。

玄関で妹達を見送る僕。

「悪かつたな。荷物持ちさせて」

「なんだよ兄ちゃん。いいつていいつて！ いつでも呼んでくれよな！ まあ、呼ばれなくとも来るけ

どな」

「そうだね。遊びに来ちゃうけどね」

「ああ、いつでも来てくれよ」

本心だつた。

いつも一緒に居た妹達と離れるのは、やはり、それなりに寂しいものがあるので。

「じゃあな、兄ちゃん！」

「気をつけて帰れよなー」

僕はわざと、ぞんざいに言つてしまふ。

「ああ、大丈夫だよ兄ちゃん」

「うん、大丈夫だよお兄ちゃん」

「あ」

月火ちゃんは、ちょっとわざとらしく、何かを思い出したようにポンと手を叩く。

「どうしたんだ、月火ちゃん？」

「さよならのちゅー、してもらわないと」

本当にいたずらっぽい目で。

「あ、そうだな。ちゅーだちゅーだ！」

とても無邪気な目で。

「ば、馬鹿。おまえらもいい年なんだから、もうそんなんのできるか」

いつもなら、今までなら、こんなことでやつつけ

られたりしなかつたのに。やっぱり環境が違うせい
かもしない。

「ちえー」

「ちえー」

いつもと違うのは、僕だけじやなかつたみたいだ
った。

「……………」

妙な間ができてしまう。

まあ、その分、戦場ヶ原さんに一杯してあげるん
だよね」

不自然な間を埋めるようなタイミングで。でも、
すぐに僕達は、いつものペースに戻る。

「あははは。えつちだなあ、兄ちゃんは」

「えつちだなあ、お兄ちゃんは！」

「もういいって！ 勘弁して！」

そんなこんなで、最後まで、妹達にやつつけられ

てしまつたけれど、

「本当に、気をつけて帰れよな」

なんて、やっぱり、ちょっと心配になつてしまふ。

「うん。大丈夫だよ」

「ああ、大丈夫！」

「じゃあな」

八段抜かしくらい（ていうか階段に一回しか足を
ついてなくないか？）で、勢いよく階段を降りる火
憐ちゃんと、和服の割に、とてとてと器用に降りる
月火ちゃん。

僕は部屋を出て、二階の廊下から見送っていた。
妹達がすぐ先の角を曲がつて見えなくなるまで。
二つ並んだ仲のよい長い影が見えなくなつても、
ずっと。

しばらく。

呆けたように。

外はいつの間にか夕焼けで、電柱の影が、近隣の
家の影と陰がその存在を強く——けれど、優げに主

張していた。

綺麗な風景だつた。

けれど、それは寂しさを後押しするような気がして。

だから。

——バタン。

僕は扉を閉め、部屋に戻る。

妹達を見送つている間、ずっと扉を開けっぱなし

だつたから、部屋は冷えきつてしまつていた。

扉を閉めると一気に空気が変わり、本当に寂しくなつてしまふ。

今は、部屋に一人なのだ。

なんだかんだと、ここ数日は人が入り浸つていたから。戦場ヶ原がずっと一緒に居てくれたから。これまでいいつも忍が居てくれたから。

久しぶりの一人きりだつた。

色々と冷静になつてしまふ。

——人間強度が上がるなあ。

黒歴史である。

まあ、止めておこう。今はそれなりに僕も更生したことだし。

うん。

しかしあいつら、火憐ちゃんと月火ちゃん、大丈夫かな。気をつけろとは言つたけど……。

でもまあ、冷静になつてみれば、気をつけろつて言つてもな。火憐ちゃんは言うまでもなく、月火ちゃんも、家にあるバールがへたつてきたから新調するんだとか言つて、結局、本当にホームセンターで新しいの買つてたし。むしろあんな奴らにエンカウントしてしまう暴漢に同情する。

それより、あんなん持つてて補導されないのでどうか？

ていうか、バールがへたるつて、どういう使い方をしているんだか——

なんて。

なんて、妹達のことを考えると一人なのを忘れら

れる。

でも、それも一瞬だつた。

だから、できるだけ幸せなことを考える。逃避なのかも知れないけれど。

戦場ヶ原。

ケ原さん。

ひたぎ。

引っ越し初日から昨日まで、ずっと戦場ヶ原は居てくれた。僕と一緒に居てくれた。

そういえばここ数日の戦場ヶ原は、やたらと甘えたような感じだつたけれど、ひょっとしたら、僕が寂しがるのをわかっていてそうしてくれたのだろうか。慰めてくれていたのだろうか。あいつ、そういう優しさについては相変わらず素直じやないところがあるからな——

口元が自然に緩んでしまう。やはり幸せな気分になれる。寂しさもかなりまぎれるような気がする。けれど、寂しさは倍増したような気もしていた。

戦場ヶ原、電話をくれるつて書き置きに書いてくれていたのになあ。
やつぱり、こつちから電話してみようかな。
——いや。
西日が入る、賑やかな妹達が帰つてしまつた寂しい一人の部屋。部屋数の多さがそれを際立たせる。僕はシンクの前に立ち、妹達と一緒にホームセンタで買つてきた鍋を洗つている。まだ最低限の炊事道具しかなかつたから、本格的に自炊はしていないけれど、こうシンクの前で洗い物なんかをしていると、なんだか一人暮らしを実感する。
寒いからお湯で洗つていた。「お湯で洗いものすると私の玉のようなお肌が、白魚のような手が荒れちゃうのよね。だからちょっと手を撫でて癒して頂戴」なんてふざけたように言う、戦場ヶ原のとてもいい表情と声を思い出していた。
シンクの前の廊下に面した窓の曇りガラスは、オレンジ色の斑模様だった。

一人だと、なんて寂しい色なんだろう。

戦場ヶ原と一緒に下校したときの夕陽の色は、確かに切なかつたけれど本当に好きな色だつたのに。

戦場ヶ原と、初めてあの学習塾跡へ向かつたとき、あんなにも（色々な意味で）ドキドキした色だつたのに――

はあ。

まあ、いつまでも感傷に浸つていても仕方がないし。

さて。

戦場ヶ原も、さすがに今日は来れないだろうしな。

うーん、夕飯どうしようかな。

ここしばらくは戦場ヶ原と外食というかデートだつたけれど、今日は一人だしな。食材も買つてきてないし、こんなときのための（ていうか、さつきのホームセンターで火憐ちゃんがやたらپッシュしていたカレー味の）カップ麺にしておくか。

あるいはコンビニ弁当か。でもこの部屋つて実家

より更に田舎だから、コンビニも結構遠いんだよなあ。実家付近でも、コンビニの数はそんなに多くないのだけれど。

そんなことを、あれこれ考えていると――携帯電

話が鳴る。

戦場ヶ原の着信音だつた。

戦場ヶ原と、お揃いの携帯電話だ。

僕は手を拭く時間も惜しくて、濡れたままの手でかまわざ携帯電話を取ると、「あ、阿良々木くん？」「曆？　今大丈夫かしら？」なんて、いつもの声が聞こえてくる。

いつもの、戦場ヶ原の声。

電話越しでも落ち着く声だ。

僕が、一番安心する声だ。

けれど、僕の心臓はむしろ、激しく動いてしまつてていた。

「ああ、大丈夫だよ」

できるだけ心を落ち着かせて応対する。もう付き

合つてそれなりの期間なのに、なんでこんなにドキドキしてしまうのだろう。

「今日はごめんなさいね。急に行けなくなつてしまつて」

「あ、いいよいよ」

「それと、色々、その、お掃除とかさせちゃつたわよね」

電話口でも、本当に申し分けなさそうにしているのがわかる。

「馬鹿、気にするなつて」

「……ん、うん。そうね。ふふつ、やつぱり、曆、優しいわね」

「ああ、僕はいつでも優しいさ」

少し低めの声で、格好をつけて言つてみる。

僕は戦場ヶ原が相手だと、どうしてもたまに、こんな馬鹿げた、どうしようもない、くさい台詞言つてしまふのだ。台詞 자체を言いたいというよりも、その反応を知りたくて。

「もうっ！　またそうやつて——ふんつ、で、結局、今日はどうしたの。買い物には行つたのかしら？」

この、途中から、無理矢理強がつたクールな口調になるのが、すごくたまらないから。

「ああ、妹達と、ほら、あのホームセンターに行つてきたよ。鍋と、ちゃんとお勧めの電気ケトルも買つてきたぜ」

「ふふ、偉いわね。もう——ずっと私、ヤキモキしていたのよ。ひょつとして、私にお料理作つて欲しくないのかしら、なんて」

「そんなこと、あるわけないだろ」

買いに行けなかつたのは、言い出せなかつたのは、むしろ逆の理由なんだから。

あまり舞い上がって、呆れられても嫌だしな。

「ふふ、妹さんとのデートは楽しかつた？」

「まあな。あいつらと一緒に買い物なんて行つたの、久し振りだつたしさ。ん、ひょつとして妬いてくれた？」

「まさか」

「ちょっとむくれたような声。

「ま、そりやそうか」

「ちょっと残念な僕。」

「……なによ」

「やっぱり、ちょっとむくれたような声。

……。

「ふつ、くくつ」

僕は戦場ヶ原の、むくれた可愛い表情を思い浮かべてしまい、我慢できずに笑ってしまう。

「もうっ！ 最近、本当にすぐそうやつて——はあ、まあいいわ。ええと、じゃあ、その、予定をすっぽかしちやつたおわびに、夕ご飯でも作りに行きたいのだけれど、もう用意しちゃっているかしら？ それには、ほら、新しい鍋とかも使つてみたいし」

「お、本当？ まだだよ。丁度、カップ麺でも食べようかなんて思つてたんだよ」

危ないところだつた。あと十分も遅ければ、カツ

プ麺を食べてしまつていたかもしれない。

「ふふ、よかつた。じゃ、もう近くだから、すぐ行くわね」

「え、近くなの？」

「ストーカーみたいでいいでしよう？ 愛されてい

るわね」

「馬鹿。じゃ、迎えに行くよ。今、何処？」

「ふふつ、いいわ。大丈夫だから」

すぐに、いつものように一方的に電話を切られてしまつたのだけれど、大丈夫つて言つてもなあ。もう夕方だし、子供じやないとはいえなあ。うーん、やっぱり迎えに行くかな。

そんなことを思い、とりあえず外に出ようと上着を羽織つたところで、呼び鈴が鳴る。

玄関を開けると、大き目の（お泊まり道具の入つてている）バッグと、この部屋から近くはないスーパーで買った食材を持った戦場ヶ原が居た。

「なんだ、こんなに買つてきてくれたのか。おい、

荷物多いな。重かつただろ。呼んでくれれば良かつたのに」

「んふふ、いいのよ。驚かせようと思つて」

いい笑顔で。

それにしても、ちょっとした旅行みたいな風体だなあ。まあ、スーパーの袋を持つて旅行はしないけれど。

「そういえば今日は、どうしたんだよ」

荷物を受け取り、僕はずつとずつと、本当に気になつっていたことを、電話では言い出せなかつたことを、できるだけ自然に訊ねた。

「ごめんなさい。ちょっとデートしてきたのよ。だから、これはおわびの意味も込めてね」

し

戦場ヶ原を、ちょっとでも疑うだなんて。

「ん、何を言つてゐるの。男よ。大体、神原とデートする日は、スケジュールにちゃんと入つてゐるし」

「なんだよ、また神原かよ」

僕は、戦場ヶ原のコートを受け取り、ハンガーにかけながら呆れたように言う。

ふう。なるほど。

そうなのだ。この女、男にも女にもモテモテなのだ。つうか一時期、羽川とも頻繁にデートしてらしいしなあ。ていうか付き合い始めの頃は、神原と関係が戻つてからは、僕とのデートなんて二の次だつたしな！

うん。あのときもそうだつたよな。

うんうん。

はあ。びっくりした——ふう、僕もまだまだだな。うんうんうん。

いつもの悪戯っぽい目や、たまに見せてくれる、邪悪なそれではなく。

「え！」

そんな目を見て、思わず、呆然としてしまう僕。

「モテるのは、阿良々木くんだけの専売特許じやないということね。私だつて、それなりにはモテるんだから」

「知ってるよ！ つか、それなりどころじゃねえだろ！ どれだけ僕がそれにヤキモキしてると思つてるんだよ！」

「いや、ひたぎさん。ちょ、ちょっと。じ、冗談だよね？」

素で、戦場ヶ原の名前をさん付けで呼んでしまう。「ん？ あら、そんなに慌てるなんて。本当、かわいいわね」

邪悪な、最近はそれに加えて、本当にかわいい笑顔を重ねてくる。

「なんだよ、もう。冗談かよ」

そんな表情を見て、ちょっと安心する僕。

「でも、男とデートしていたのは本当よ」

ひたぎは、眞面目な、冗談ではない本気の目で言う。

「！」

僕は、あからさまに動搖してしまう。
「…………お父さんとだけれど」

「ちょっと僕を睨むように。切れ長の美しい目で。いまだに僕をドキドキさせる目で。」

「そんなに、信用されていないのかしら」

「出会った頃のような、少しクールな声。

「馬鹿！ おまえな、ひたぎ……僕はな、本当に心配だつたんだよ。電話くれるつていつたのに、なかなかくれないしさ——」

最後の方は、子供のようにむくれた声になつていたかもしれない。

僕の嫉妬に満足したひたぎは、甘えて抱き付いてくる。絡めてくる手はとても冷たかつた。僕の頬に触れる柔らかな頬も本当に冷たかつた。

「ひたぎ——こんなに冷えちゃつてるじゃないか。

僕はな……」

僕のことをいじめて嬉しいくせに、ちょっとやりすぎたつて顔をしてるくせに、それでいて照れて恥ずかしいくせに——だから、ひたぎは僕の台詞を強引に遮る。

柔らかくて。

暖かで。

いい匂いがする。

ひたぎの味を直接感じる——

僕はそのまま、強く抱く。

唇を離したひたぎは熱い視線で僕の目を見つめ、

「ごめ……ごめんなさい。本当は、もつと早く連絡

するつもりだつたのだけれど、その、お父さんに会うなんて、ちょっと恥ずかしいし、タイミングが、ね、ずっと、この部屋の近くまで来るまで、ね、ずっと迷つて……」

おかげしに、僕は無言でそんな言葉を遮り、深く絡めて熱を持つた感情と液体を吸い——流し込んだ。

特別な感情を伴なつた液体を交換する。

冷たい手を僕の手で包み、僕の身体とひたぎの身体に挟む。冷えきつた手が少しでも暖かくなるように。

オレンジ色の光が、ひたぎの整つた顔に深い陰影を付けていた。その赤みを帯びた頬は夕陽だけのせいではない。それは本当に綺麗で——古い映画の、ずっと語り継がれる印象深いシーンのようだつた。

僕は、不謹慎にも、その美しさが欲しくなる。有体に言えば——そのまま押し倒したくなる。

抱きたくなる。

セックスをしたくなる。

唇を、舌を離すと、二人の液体が糸を引いていた。キラキラと光っていた。いやらしいのに、とても綺麗に。

「ん」

そんな僕の唇を白魚のような手で、柔らかな指で撫でてくれる。

僕は、我慢ができないくなる。

「ん、こんなにしちゃつて。駄目よ」

ひたぎは柔らかな下腹部で、僕をめり込ませるよう押し付けたまま——いたずらっぽい目をして言った。

「駄目？」

僕はひたぎの細いくびれた腰を抱きながら、僕の想いを伝えるように、強く押し付けたまま言う。

こんなときいつも思うのだが、この女、本当に腰のくびれがすごいのだ。

本当にいつも思うのだが、この細いくびれのどこに内臓が入っているのだろう。入っていることは確かなのだけれど、毎日のように何度も何度も直接確認はしているのだけれど——それが信じられないくらいのプロポーションなのだ。それは大人っぽい黒のワンピースでより増幅され——そのなめらかな布の感触は、更に直接肌のぬくもりを、更に奥深くにある直接の熱さに触れたくさせる。

今すぐに熱い内臓の存在を——そのぬめつて柔らかなひだの感触を、粘膜の感触を確認したくなる。

いつものように、愛したくなる。

いつものように、一つになりたくなる。

だから、僕は更にひたぎを強く抱いた。壊してしまったうなくらいに。いつもその熱さを確認する前のように。熱さを交換する前のように。お願いをするときのような——すがるような目をしていたかもしれない。

「——駄目。ご飯の——用意、するんだから」

ひたぎは潤んだ目で辛そうに言つた。その癖——僕を強く抱きしめてくる。

僕もひたぎも体温が上がっている。それは、暖房が効いてきて部屋の温度が上がつたせいだけではない。

下半身がもやもやして、原始的な衝動に駆られる直前だつた。けれど——けれど、僕達は少しだけ大

人になつたからだろう。そこまでは至らなかつた。

でも、なかなか離れられなくて、そのまま数分の間——ずっとキスをしたまま抱き合つていた。

身体を密着させ体温の交換を続ける——

二人の上着が擦れあう音を感じる——

服と下着が擦れあうのを感じる——

服の上から身体の形を感じる——

柔らかで暖かな熱を感じる——

強く抱き合い絆を感じる——

激しい心音が聴こえる——

体液の交換を続ける——

心を通わせ続ける——

髪に手を入れる——

匂いを感じる——

味を感じる——

愛しい想いで一杯になり、溢れそうになる——

離れられない。

絶対に離さない。

この女とは、絶対に離れたくない。

そんな中、何かをやつとのことで決意したように、
ひたぎは言う。

「はあつ……さて。用意するから、こよみは——ん
つ、暦はテレビでも見ながら待つて頂戴」

途中で甘い声がいつもの——いや、いつもよりク
ールな声に変わる。

「うん。ひたぎの後姿、見ながら待つてる」
でも、二人の身体は離れていなかつた。

「ふふん、いい子にして待つていなさい」

ひたぎは名残惜しげに僕から身体を離すと、持つ
てきた大きなお気に入りのバッグからエプロンを取り出し、食事の用意を始めた。このバッグには本当に色々なものが入つているのだ。お気に入りのちょっと高そうなドライヤーとか、可愛いパジャマとか。
ていうか初日から泊まる気満々だつたもんな。

ひたぎの手際良く小気味良く料理をする姿——僕はそれを見ているだけで楽しいのだ。いつもの馬鹿

な話をしながらだから、それは尚更で。

時々振り向いて突つ込みを入れてくれたり、例の得意顔で突つ込みを待つたり。

二人でいつものよう、笑いながら。

ひたぎのいい笑顔に、幸せを感じながら。

「なんだい、ひたぎさん」

こんなときにふざけるとき、なぜか名前をさん付けて呼ぶ。僕達の最近の流行りなのだった。

ひたぎさんはエプロンを外してから、僕の後に回り、抱きついてくる。

僕の肩に頸を乗せる。

僕を抱く力を少し強める。

そして、耳元で、

「今日は、いえ、今日も——ええと、泊まつていつ

ていいかしら」

なんて、囁く。ささや

僕達は一人並んで、狭いシンクの前で食器を洗つていた。

時々、腕がコツンと当たると、二人でちょっと照れたようにはにかんでしまう。こんな、なんでもないことが——二人だととても幸せなのだ。

でも、一人だと、あつという間に洗い終えてしまう。

「ねえ、こよみさん」

いつも僕を癒やしてくれる、柔らかなふくらみの感触、きゅうつと僕を抱きしめてくるモデルのような細い腕、半分くらい吸血鬼である僕をも魅了する甘い声、さらさらでいつもいい匂いのする髪——

一体、この女は、僕をどうしようというのだろう。『え、あ、も、勿論いいけど、お父さん、大丈夫なのか?』

思わず動搖して、いいけど。なんて言つてしまつたけれど、本当は、僕の方から土下座してでも頼みたいくらいだつた。

「ん、またしばらく忙しいみたい」

僕に、頬をすりすりとしながら。

「そつかあ。大変だなあ」

「だからね、ひたぎちゃん……。寂しいんだつて」

本当に、寂しそうに。

本当に、甘えて。

まるで子供のように。

あの大人びたひたぎが。

いつも甘えさせてくれるひたぎが、昔は心を表に出さなかつた、出せなかつたひたぎが。

こんなにも、露わに。

心を剥き出しにしてくれている。

だから僕は、剥き出しにされた敏感で大切な部分に触れるよう、ひたぎの手を取る。

ひたぎは指を絡めてくる。

「こよみ——ねえ、こよみ——」

甘えた声で僕の名を呼びながら、絡みあつた手をそのままに、器用に僕を後に向かせ、キスをねだる。

……………。

「……………んふつ……………んくう……………」

——んちゅ。

——ぴちゅ——くちゅ。

少しいやらしい音だけが、静かな部屋に漂う。ただよ。

……………。

……………んふつ——はあつ……………。

深いキスが続く。

お互いの体内を、表面より高い温度とぬめりを確認しあう。

愛しあう。

息が続く限り。

苦しくなる、手前まで。

限界まで。

「いけない」とつて……」

「ふうう」
「ぶはあつ」
「ずつと。」

「ふうつ。ねえ、こよみ。もつと——んううつ」

「何度も。」

「何度も。」

「何度も。」

「んふう……はあつ、こ、この酸欠で意識が飛びそ

うに……はあつ、なる手前がたまらな——はあつ、

はあつ……たまらない、わね」

ひたぎは、もう、本当にふらふらになつていた。

基本DSなのになんでこんなにMなんだよ！　てい

うか震えてるじやないか。

ていうか、二人とも興奮してゐから、鼻だけじゃ、

もう呼吸が間に合わないんだよ！

「はあつ、はあつ、馬鹿。こんなの本当に……はあ

つ、死んじやうつて！」

「んふふ。なんだか——ちょっといけないことをし

ているみたいで、ドキドキするわね」

「でもまあ、いけないことかな」

「ふうう」

「おい、大丈夫か？」

ひたぎは倒れそうになり、僕に震えた身体を任せ

てくる。

「はあ、ええ、ふう、ごめんなさい。はあつ、ちよ

つと——ちょっとだけ、いつちゃつたかも——」

「えつ」

「本当、いけないこと——しちやつたわね」

苦しそうな顔なのに、につこりとしながら、甘え

ながら。

「もつとも——私は、ふふつ、いつちゃつたのだけ

れど」

「うまくねえ！」

そんなことを言いながらも、愛しくて、こんなに

も細いのに柔らかな身体をぎゅっと抱きしめてしま

う。

僕はひたぎのさらさらの髪に、甘えるように顔を埋めるようにしてから、言つた。

「ん？」

ひたぎは可愛く、小首を傾げる。

本当に油断しているときにしか、見させてくれない仕草だ。

「僕もさ、いけないことっていうか、ちょっと親には引け目があつてさ」

「引け目？」

僕の目を見ながら、少し考えるような表情をして。

そして、すぐに。

表情が変わる。

「ああ——なるほど。まあ、そうよね。女を連れ込みたいから一人暮らしさせろって言つたのか。なんて言われたら、言い返せないものね」

ひたぎはいつもみたいに僕をからかうように、冗談のように、邪悪な笑顔で——出会つた頃のようにクールな調子で言つた。

でも、僕は、

「……そなんだよ。実際、その——ええとさ、その、やっぱ、そういう部分があるから……」

照れながら、眞面目に答えてしまう。

ちよつと驚いたような顔をしたひたぎは、僕に強く強く抱きつき、照れたようにして、「もう——いやらしい男」と言つた。

甘えた声で。

蕩けきつた声で。

——僕は、更に照れてしまう。

「はあ。いやらしいこよみさんは、女の子を部屋に引きずり込んで……。まつたく一体全体何をしよう」というのかしら」

「そ、そんな言い方しなくてもいいじゃないか

「ん、でもひたぎちゃんは、色々と言う事聞いてあげるらしいわよ。約束をすっぽかして、男とデートしてきちゃつた引け目があるとかなんとかで」

「え、ほんとに？」

僕は本気で食い付いてしまう。

「ちょっとドキドキしながら。
なあに？」

「ちょっと。なにそんなに食い付いているのかしら。

変なプレイとかは嫌よ。あの、その、ええと、浣腸

ダイエットとか、あ、あれは冗談だからね」

少し引いたように言う。

そつかあ、やつぱ浣腸ダイエットは駄目か——い

や、別に興味ないけど！ ていうかダイエットもな

にも、ひたぎは痩せすぎ、というか完璧だし。本當

に無駄なところがなくて、付くべきところは付いて

るし……。でも、もう少し肉付きがあつてもいいよ

うな気はする。一番太ったとき（それでもかなり瘦

せてる部類だと思うけど）だつて、お腹とか肉つま

めなかつたんだぜ。もつとも、つまもうとしたら半

分本気でひっぱたかれただれど。涙目で。

——それにしても、ひたぎにしてもらいたいこと

か。となると、やつぱり、あれだよな。

「ええとさ」

優しいけれど、ちょっと不安げな声で。

僕はすごくドキドキしながら、

「…………膝枕、してくれないか？」

と、言つた。

「ん？ いいわよ。じゃ、あつちでね」

ひたぎは嬉しそうに僕の手を取り、すたすたと奥

の畳部屋まで僕を引つぱる。

キツチンでは床に座るわけにはいかないし、炬燵

のある部屋は炬燵が中央に鎮座していて狭いから、

奥の畳部屋なのだろう。この部屋は寝室として使つ

ていて、普段ふすまを閉めたままにしているので、

今はかなり寒いはずだ。

ひたぎは布団の前、畳の上で正座をして。

んふふ。なんて、につこにこしながら。

ぽんぽんと膝を叩いて、

「おいでなさいな」

なんて言つてくれる。

僕は言われるままに、ひたぎの膝に頭をのせた。

畳は冷たかつたけれど、ひたぎは本当に暖かで、

思わず、

「ひたぎ、暖かい——」

なんて、口にしてしまう。

「こよみも暖かいわ。部屋が寒いから、なおさら尚更ね」

そんな言葉に、そんな表情に、そんな温度に、そんな柔らかさに、僕は我慢ができずに膝を頬ですりすりとしてしまう。

「ん、なに。甘えちゃって」

そんなことを言う声はとても甘くて、僕は溶けそうになつてしまつていた。

「だつてひたぎも甘えてきたから、おかげし」

僕は身体を反転し、ひたぎのお腹、下腹部を頬ですりすりとする。

「ちよつと、嫌つ！　えつち！　くすぐつたい！」

腰のあたりから、脇腹をまさぐる。

「ちよ、ちよつと、駄目！　本当にくすぐつたいから！　お願ひ、嫌！　あんつ、いや、あははは、もう、馬鹿んつ」

ひたぎは、ふざけて僕から逃げるようにして、布団の上に寝転がつてしまつていた。

僕は、布団にひたぎを押し倒してしまつていた。もう何度もこんなことをしているのに。

こんなことになつてしまふと、やつぱりしばらく、無言になつてしまふ。

静かな時間が過ぎる。

お互の心音が聴こえる。

何故だか静かにしなければならないような空気になる。

「ね、こよみ。服が皺になつちゃうから……」

秘密のことを話すように、ヒソヒソ声で言う。

「あ、ああ。そうだね」

僕も同じく、ヒソヒソ声で。秘密を共有するように。

——それは一人だけの秘め事だから。

僕達はそのまま服を脱いだ。さすがに服を脱ぐと、この部屋は震えるほどに寒い。

だから、すぐに布団に入る。

布団の中で、すぐに抱き合う。

「ん、冷たいっ」

ひたぎは、冷たい布団に触れ、ぴくっとする。柔らかな身体で僕を締めつける。

「一緒に暖めよう」

僕はちょっと腕がつりそうになりながら、ひたぎ

から離れないようにして、厚手の毛布と掛け布団を、

二人の肩の位置まで上げる。

柔らかで暖かな身体に覆い被さるようにして、ぎゅっと抱きしめる。

体重をかけすぎないようにして、体重をかける。

二人の距離を零にするために。

「なにキザな台詞を言つてのかしら」

おでこを僕のおでこにコツンとして。

「へへ、ごめん」

「そんな台詞、絶対に私の前以外では言わないで頂戴」

僕の頬を両手で抑え、視線を一ミリもずらさない

ようにながら。

ひたぎの視線に居抜かれた僕は、その美しい瞳に

吸い込まれそうになる。

「勿論だよ」

「んふふ、格好いいわ——本当に……私の前でだけ

だからね」

「約束する」

そんなことを言いながら。

お互いの身体に触れあう。

二人はじやれあつて。

二人は抱き合つて。

二人の体温が、布団の中の温度を上げる。

二人の温度は、身体を擦りつけあつている部分か

ら上昇する。

それでも、少し身体の位置をずらすと布団に冷たい部分が残つていて、そこに触れた瞬間、身体がピクリと反応してしまう。でも、すぐに、そんな部分も少しづつ暖かくなる。それだけ二人の体温が上がつていたのだ。興奮していたのだ。

僕とひたぎは、布団の冷たい部分を僕達の熱で埋めていくよう絡みあう。

ひたぎはとても柔らかだつた。

とても暖かだつた。

もう、何度も何度も触れているはずなのに。
どうしてこんなにも――

「こよみ、あつたかい」

ひたぎも僕に熱をくれるよう、僕から熱を奪うように抱き付いてくる。

裸で抱き合ふと、こんなにも暖かくなるのか――
雪山で遭難したときに、裸で抱き合ふ意味がわかつたような気がする。

そんなことは、何度も知つているはずなのに。

「ひたぎも、あつたかいよ。柔らかいし、幸せ」

「私も幸せ――」

「ねえ、おっぱい、いい?」

確認すると同時に返事を待たず、僕は布団に潜り込む。少しだけ、外の冷気が布団の中に侵入する。

「もう、本当におっぱい大好きなんだから」

呆れたように。

ひたぎは僕の頭を撫でながら、嬉しそうに言うのだ。

僕は何度も――それこそ毎日のようにしているのに、それを前にしてしまうと必死になる。必死になつてしまふ。本能なのだろう。この柔らかで優しい膨らみに顔を埋め、敏感で感触の異なる、段々と硬くなる、僕の口の中で少しだけ大きくなる先端を舐め、甘噛みする。ひたぎが痛いという直前まで、歯

型が尽く直前まで。その感触を堪能する。

「んうう」

苦しそうな声で我に返る。

「ご、ごめん、痛かった？」

「ん、ちょっとね。ふふ、本当、最近は絶妙ね。最初の頃は痛くてしようがなかつたわ。でも、あまりキスマーケは……んうつ」

僕はその弾力が増し、ちょっとだけ膨らんできた先端を、舌と歯で優しくしごくようにしてから、少し強めに噛んでしまう。

ひたぎはそれにダイレクトに反応して、身体を弓なりにする。同時に布団に入り込んだ冷気が、二人を少しだけ冷静にする。

「つ——痛いっ。馬鹿っ」

「ご、ごめん……」

「しようがない子なんだから」

僕はうつすらと付いた歯型を舐めながら、柔らか

さと弾力を堪能していた。ひたぎも気持ちよさそう

にしている。

胸と腋の境界。

胸の谷間。

弾力の違う先端、感触の違うその周辺から、柔らかな癒しの部分。そして、ふもとの境界まで。

匂い、味、感触、温度、形状——全てが好きだ。

僕はそれを言葉にることができなかつた。だから、甘えるしかなかつたのである。それで、ひたぎは喜んでくれるから。伝わるような気がするから。

——僕がそんな柔らかで気持ちいい部分に、埋もれ癒やされていると、

「ねつ？」

と、甘えた声で。

ひたぎは柔らかな手で、僕の顔を胸から引き離すようにして言う。

最近、ひたぎはこうやっておねだりするのだ。

「ん？」

こんな僕達に、無駄な言葉は必要なかつた。

僕は曖昧に返しつつも、ひたぎの身体を、その官能的な凹凸を、美しくなめらかな感触を、優しい温度を——僕の体表面全ての神経で確認するようにながら、その身体の上をゆっくりと移動する。ひたぎの柔らかな胸から、ひたぎの蕩けた顔が正面に見える位置へと。

僕の下から、ひたぎの長い足が絡みついてきた。

僕の手は、ひたぎの腰と背中を抱いていた。しつかりと離さないように。

「こよみ——ねつ？」

これ以上ないくらいの甘い声。

これ以上ないくらいの蕩けた表情で。

無論、僕に抗うことなどできない。

こんなひたぎに抗うことができる奴は、人間ではないだろう。

そう断言できる。

なにせ、半分ほど人間でない僕が言うのだから。

寒いから掛け布団はそのままだつた。ひたぎは僕

に絡みつけていた長い足をゆっくりと離し、左右に広げた。僕の目をしっかりと見ながら。掛け布団はテントのように、立てられた足で支えられる形になり、同時に外の冷たい空気がすうっと入ってくる。少し汗ばんでいた僕達には少しだけ気持ちいいのだけれど、すぐに寒くなってしまいそうで、また強く抱き合う。お互いの身体で暖めあう。だから上半身はぴつたりとくつついているけれど、下半身だけは離れていた状態になっていた。僕は広げてくれた足に割り込む体勢だった。だから、そのまま——そのまま深く割り込んだ。押し当てるだけで、ぬるぬるの熱い場所へ自然に。あるべき場所へと埋まる。手を添えなくともそのままで。僕はそのくらい硬くなっていたのだ。ひたぎの潤んだ瞳を見ながら腰を少しづつ前に移動させると、先端のぬるぬるとした熱さが僕の根本に向かってくる。その深度が深くなるにつれて、ひたぎの足が僕の腰を強く締めつける。

ひたぎはその侵入してくる感覚に、目を閉じそうに

なつてしまふ。

でも。気丈にも目は閉じずに。

本当に僕を愛してくれている——

そんな潤んだ目をして。

嗚咽のような声を出して。

僕もそれに答えるように、絆を深く打ち込むよう

に——身体を深く埋めた。

ひたぎの足の付け根が、僕の付け根と交わる。
深く深く、杭を打つよう。

こんなとき、ひたぎは柔らかくてなめらかな太も
もと、僕以外は絶対に見ることも触れることもでき

ない、その付け根を、何度も何度も僕の同じ部分に
擦りつけてくる。この柔らかな感触と体温が僕には
たまらないのだ。ひたぎを強く抱きしめ、僕も同じ
部分を擦りつけること以外、他に何もできなくなつ
てしまう。

僕はしばらく、他の動きができないのだ。

脳が落ち着くまで。心が冷静さを少しでも取り戻

すまで。

ひたぎはそんな僕の頬を撫でてくれている。本当に慈しむような目をして。僕が落ち着くまで、ずっと。

……………。

そんな感情の高まりがやつとのことで収まると、
僕は動けるようになる。だから、もつと気持ちよく
なるために、深くお互いを確認するために、いつも
のように動いた。

でも。

僕がひたぎの上で動くと、同時に掛け布団を上下
させてしまう。そのたびに冷気が入り込んでしま
まい、布団の中の温度を下げ続けていた。だから、
僕はひたぎと密着することにした。ぴったりとくっ
つくことにした。

僕は、その感触に溺れていく。

ひたぎの深みに嵌はさまっていく。

「んつ、あつ……んつ」

僕が身体の中を動くたび、嗚咽のようだ。

「んつ……んつ」

僕がゆっくりと動くと、ゆっくりに。

「んつ、あつ、あつ、あつ、あつ、ん、ん、あん、

んつ」

僕が速く小刻みに動くと、それに合わせて、ひたぎは声を出してしまう。

深くすると、ちょっと苦しそうに。
「んくうつ……」

二人は密着して愛しあう。

隙間を埋めるようにして。
ひたぎも腰を動かしてくれている。

自分からこんなに——というのは本当に珍しいことだつた。

むしろ、こんな関係になつたばかりの頃の方が、
ひたぎは積極的だつたのだ。お互いに力加減がわか

らないという、そんな頃の方が。

今は、布団の中で見えないからというのもあるのだろう。

見えないから、その分だけ——とても深く。

「んくう……。こよみ……。大好き」

「僕もだよ。ひたぎ——愛してる」

どうしようもなく愛おしい気持ちから、それをどうしても伝えたくて——僕は思わず、いつものように腕を立てて大きく動こうとする——やはり布団が冷たい空気を吸い込んでしまう。

「はあつ、ふう——んふふ。やつぱり、ちょっと寒いわね」

ひたぎはぶるぶると震えて僕にしがみついてくる。体内でも、僕をきゅうっと締めつけていた。密着して汗をかいていた部分があつたから、その寒さは尚更だつた。逆に、その寒さが今の暖かさを感じさせていることも確かなのだけれど。

「ごめん、くつつくね」

「ええ。もつと体重かけて、いいわよ。ぴつたりくつついて頂戴。えつと、その、私、動くから——」

とても恥ずかしそうに。

こんなにも愛しあつてているのに、もう何度も全てを見せあつてているのに、直接、僕自身を体内に取り込んでくれているのに——ひたぎは恥ずかしそうに途中から僕の顔を見ないようにして、耳元で囁くよう言う。

「うん、お願ひ。ひたぎ——」

そんなひたぎを、僕は、愛おしくてどうしようもなくなる。

「ん？」

「愛しててる」

「馬鹿。私も」

…………。

ひたぎは、僕の下で僕の体重の大部分を支えていた。

るにもかかわらず——官能的な動きをしてくれてい

た。

「はあつ、はつ、ふう、はあ、ふつ、くつ——」「くつ、ひたぎ……」

僕はされるがまま、それを享受していた。

「んんつ、あんつ、んくつ、こよみ、ううつ——」
ひたぎの汗がすごい。さすが元陸上部のエース、
そのスタミナは伊達ではなく、汗にまみれながらも
僕をいつまでも懸命に愛してくれている——

「なあ、汗、すごいぞ。暑いだろ？ 掛け布団めくるな？」

「はあつ、うん、お願ひ。んふふつ。こよみは、大丈夫？」

「僕も、暑いよ。汗、すごいだろ」

「ふふ、本当ね」

僕が掛け布団を半分ほどめくると、二人の熱い身体は布団の外の空気にさらされる。それはとても気持ちのいい冷たさだった。

ひたぎは僕の額の汗をぬぐつてから、首筋の汗を舐めてくれた。敏感になつた肌を舐めるひたぎの舌

は、本当に気持ちがよくて、

「ひたぎつ」

思わず名前を呼んで、深く押し付けてしまう。

「んんつ、こよみつ」

掛け布団が必要なくなるほど体温が上昇した僕達。隣の部屋の暖気も、大分この部屋へと移動してきたのだろう。

だから、僕にはもう遠慮する理由がなくなつただ。

だから、いつものように激しくひたぎを愛そうとすると、ひたぎは長い足で僕をぎゅうっと締めつける。

「動いちや、駄・目」

甘えた声で。

「私が、可愛がつてあげる」

久々のドSな表情で。

「あ、うん」

だから、僕は素直に従うしかなかつた。

「じゃ、さつきみたいに、ぎゅーって体重をかけて頂戴」

「うん」

僕がひたぎに埋まるように体重をかけると、ひたぎは嬉しそうに喘ぐ。官能的な動きがゆっくりと再開する。

僕はされるがまま、あまりの快感に何も考えられなくなる。

だから、

「はあっ、ひたぎ——ひたぎ、ひたぎつ」

荒い息の中、愛する女の名前を連呼することしかできなかつた。それに呼応するように、ひたぎは涙が出そななくらいの快楽を与えてくれる。

動いていないのに筋肉が緊張してしまつ。

僕は何度も泣きそうになりながら——許しを乞う。

「うう……」、「ごめんひたぎ。うつ、ちょつ、ちょ

つと待つて……」

そのたびに許してくれる、優しいひたぎ。

「ん。出ちやうのかしら？」

「……うん」

「ん、許してあげる。んふふつ。大丈夫になるまで

いい子いい子してあげるから」

僕の頭を撫でながら、子供をあやすようにしながら

「……うう、うん、ごめんな」

何度も、何度も。

僕は柔らかな胸を愛撫しながら、身体から溢れそ

うな感覚が落ち着くのを待つ。

……………。

「ひたぎ、もう大丈夫。今度は僕が——」

「んふふ。駄目」

「駄目？」

「そう。駄目。今は私が……ね」

今度はゆつくりだつた。

快感がじわじわと続く。ゆつくりと昇りつめる感

覚。いつもは僕がしているのに。されるのは、してもらうのがこんな感覚だったなんて。

今までも勿論、こんなことはあつたけれど。今日は――

……………。

ひたぎはゆつくりと、僕を愛してくれている。

油断して、優しい蕩けた目をしながら。さつきま

でD Sな表情をしていたのに。

僕は動くことを禁じられていたから、深いキスしかできなかつた。

ひたぎの熱い舌、柔らかな唇を愛した。その裏も

表も。

ひたぎの綺麗な歯を愛した。ひとつひとつ、その隙間も。

ひたぎの口腔を届く範囲で、全てを。

「……んふつ……くつ」

「……んつ……うつ」

どれだけの長い時間だつたのだろう。そのなだら

かな上昇は——気付けばいつのまにか限界まで達していた。頭がぼおつとして、もう何も考えられなかつた。だから、僕にできることは、またひたぎに甘えて許しを乞うことだけだつた。

ひたぎも、限界に近そくだつたから。

とても苦しそうに、気持ちよさそうな表情をしていたから。

とても苦しそうな、気持ちよさそうな声を出してしまつていたから。

僕は、もつともつと甘えて気持ちよくして欲しかつた。

まだまだ、愛して欲しかつた。

だから、また、

「な、なあ、ひたぎ——出ちやいそだよ」

なんて言つて、甘えてしまう。

「んふふ。駄目——んつ」

「えつ」

「んう、はあつ、んつ——我慢——なさい」「……ひたぎ、頼む——」

今度は許してくれなかつた。腰の動きを止めずに——僕を優しくいじわるな目で見つめながら、蕩けているのにドSで邪悪な笑みを浮かべながら。

僕は必死で懇願した。

「……な、なあ、ひたぎ、許して、も、もう——」

「んつ……しようがない子ね。……んうつ……もう

——漏らしちゃうの？」

僕の頬を撫でながら優しく言う。でも、腰の動きは止めてくれない。

「……んあつ、はあ、はあつ、出ちやうつ！ ご、

ごめん！ ひ、ひたぎっ！」

動いてはいけないと言っていたのに、ひたぎの付け根に僕の付け根を、その柔らかな部位が変形するくらいに押し付けてしまつていた。

僕は我慢できなくて情けない声を出し、泣きながら——謝りながらひたぎの脛に射精してしまつてい

た。僕の全ての感情をひたぎに流し込んでしまつていた。

その始まつてしまつた流し込む感覚は——もう自分では制御できない。

強制される動き。

その快楽のために性器を重ねているのに。

何度も知つている感覚のはずなのに。

……母親に泣きながら許しを乞う子供のように、
僕はひたぎにしがみ付いていた。

それでも、射精は続く。

あまりの快感に、僕は涙が止まらなかつた。
あまりの快感に、僕は声も出せなかつた。

「……んうう——んつ、ああつ——んふふ、ちよつ
と、そんなにぎゅつてしないの……。はう、ふう、
あらあら……こよみつたら——ごめんね」

——なんて、優しく言われながら。

優しく、涙をぬぐわれながら。

僕は——やつとのことで、ひたぎの脣での射精を

終えるのだつた。

その後もずっと、ずっと——優しくしてくれたひたぎ。僕はその後、二回も我慢ができない——ひたぎに謝りながら出してしまつていて——

そんなひたぎも、さすがに疲れて動けなくなつていた。男の体重を支えながらの行為がどれだけの体力を消耗するか——

「…………はあつ、ふうつ、はあつ——ちょ、ちょ
つと疲れちゃつたわ」

実際には、ちよつとどころではないだろう。上に乗つていただけの僕でも、これだけ消耗しているのだから。

だから僕はひたぎに強く抱きつき——強引に身体を横に向ける。

「あんつ

ひたぎの髪が長かつた頃には絶対にできなかつたことだ。二人で横向きに抱き合う形になる。これ以上ひたぎに負担を強いるわけにいかないから——

僕は、急激に下がつてくる体温を補うため、掛け布団を掛け直しながら謝る。

「……はあつ、はあつ、はあつ——ごめんな、重かつただろう?」

ひたぎは僕の髪をいじりながら、額の汗を拭つてくれながら、

「…………んふふつ——ふうつ、はあつ……でも、

気持ちよかつたでしよう?」

と、激しい息と汗と鼓動の中、優しく言つてくれれる。

「…………うん」

僕はちょっと恥ずかしくなつてしまい、照れながら目線は外してしまいかながら答えた。

「……いつもは——ふふつ、こよみがしてくれているのよ」

息が落ち着いてきたひたぎは、そんなことを言いつながら、僕を押し倒すように仰向けにして——いつ

もののように僕の胸にもたれかかり、甘えてくる。

ひたぎの形のいい胸が、僕の身体に沿うようにならなくて、僕の身体に密着していた。僕はこんなにも全てを見せ甘えてくれるひたぎが、もう、愛おしくて愛おしくてたまらなくなつてしまう。

「んふふ——やつぱりこれが一番いいわね」「ん、ひたぎ、これ好きなの?」

「ええ。よくあるじゃない? こんなときに女が男の胸にもたれかかるシーン。そうね。ほら、ゴルゴ13とか」

ゴルゴかよ! いや、僕ゴルゴ13大好きだよ?

さいとう・たかを先生は渋くて好きだけれど。

それでも言わせてもらうけれど、本当にひたぎの濫読らんじくつぶりは酷いな。

「まあ、確かにゴルゴ13でもあるだろうけどさ。もう少し少女漫画とかさ——」

「嫌よ」

即答だった。

一切の迷いのない。

こういう所は本当、変わらないよな——

僕はそんなひたぎが愛おしくて可愛くて——髪をくしゃくしゃつとしながら——強く抱きしめてしまふ。

「嫌ならしようがないけど」

ひたぎは抱きしめられるのを、髪をくしゃくしゃとされるのを、気持ちよさそうにしながら、

「——だつて……。照れくさいじやない……」

なんて、言い——僕の胸に顔を埋めるようにして恥ずかしがる。

「…………」

僕はゴルゴばりに黙るしかなかつた。

この女、どんだけ僕を萌えさせるんだ!

ていうか正直なところ、未だに照れる基準がよくわからぬのだけれど。

「……で、こんなシーンがどうしたんだ?」

だから、僕はひたぎのことをもつともつと知りた

くなる。話を訊きたくなつてしまふ。

「……まあ、なんていうか——こういうシーンつて馬鹿馬鹿しいと思っていたのよ。昔はそれこそね、その——私は——こよみは知つてゐるでしよう?

乱暴された後に、こんな気持ちになれるなんて、思

いもしなかつたわ」

少しだけ悲しい目をして、遠くを見るようにしながら、

「ああ、そつか——」

だから僕は、また、ひたぎを強く抱く。

ひたぎも、細くて長い足を僕に絡ませ、身体全体で僕を抱きしめてくる。

「ふふつ、でもね——なんていうか実際にね。こんな風になると、やつぱりね」

いつの間にか、照れ照れになつて「えへへ」なんて、くねくねしているひたぎ。僕と目が合うと「やだ……」なんて言つて顔を真つ赤にしながら——恥ずかしがつて、くねくねと布団の中へと潜つてしまふ。

う。

僕はそんなひたぎが愛しくて愛しくて愛しくて愛しくて——だから、無理矢理布団から引っぱり出し、上にのしかかつた。

「——ちよ、ちょつと嫌つ」

ひたぎは恥ずかしそうに、慌てながら言う。

「駄目？」

僕はどうしようもなく硬くなつた部分を、ひたぎの柔らかでぬるぬるの部分に当てながら訊いた。

「——そんな、わけ……ないでしよう」

そんなことを言いながら、目を瞑つてキスをねだる。

僕はねだられるままにキスをして、愛撫をした。
柔らかな胸を。

僕の先端が当たつている、見えないその部分を。

ひたぎは本当にスレンダーで、おっぱいとお尻以外の無駄な肉は本当に少ないのだが、この部分はそうではなく——だから、ほんの少しだけ深くにある

のだ。だから、とても柔らかな肉を広げてやらないと小さくて敏感で気持ちいい部分に当たりづらい。それに気付いたのは本当、最近のことだけれど。でも、僕がその部分に触れると、ひたぎは本当に恥ずかしがつて僕の顔を見てくれない。

今もそうだった。

僕の首の付け根に顔を埋めている。

僕の肩を甘噛みしている。

僕はひたぎの耳元で言う。

「今度は僕がするよ。離れないように、するからね

——

「…………うん」

ひたぎは、僕の肩を少し強めに噛んでから答えてくれた。

僕はひたぎの敏感な部分が露出するよう、左手で広げてから、広がつたままになるようにしてから密着する。そこを意識して恥骨を優しく当てるよう、めり込ませるようにして動いていた。

ストロークは取らないで、奥で動くようにして。敏感な部分に触れ続けるようだ。

「こよみ、それ、好き——ねつ、もつと……ねつ。ん、ん、……んつ、はう」

ひたぎはそこに当てるたびに痙攣する。

「こよみつ——ねえ、こよみ……ねつ、もつと……んううう……」

だから僕は懸命にひたぎを愛していた。

「ひたぎ。気持ちいいよ。愛してる——」

「んつ、私も、愛してる——ああつ、んうつ」

僕達の性器は、内部も外部もぬるぬるになつていた。

中からも外からも気持ちよくなつていた。

敏感な神経の集中したそこだけではなく、身体全

体で愛しあつっていた。身体全体で感じあつていた。

こんなとき、僕達は本当に一つになれた気がするのだ。

触れて欲しい部分、愛して欲しい部分が言わなく

てもわかる。目を見るだけで、いや、それすら見な
くとも心が一つになつたように通じあうから。

ひたぎは何度か僕をきゅうっと締めつけるようにして、震える。僕はそんな蕩けたひたぎを愛おしくして抱きしめる。

それを可能な限り、何度も何度も、繰り返し繰り返し続ける。

そんな風に、僕が懸命にひたぎを愛していると、

ひたぎが僕を愛してくれていると、ふと、

「んくつ、はあう、あんつ、んつ——ねえ、こよみ。ねえ……私、この天井も好きになるのかしら」

僕の下で喘ぎながら苦しそうに、蕩けた表情をして、ひたぎが言う。

「ん？ 天井？」

僕は高まりすぎていたものを抑えるためにも、動きを止めて訊ねた。

「はあつ、ふう、うん。天井。私ね、私の部屋の天井とこよみの実家の部屋の天井がね、なんだか好き

なのよ。こうしているときに、幸せな気分で見てるからかもしれないけれど」

僕に抱き付いた声で言う。

「そつか。僕はもう、こんなときは——ひたぎしか見えないんだ。ひたぎの匂いと温度と柔らかさしかわらないよ」

男の僕と、女のひたぎはやっぱり違うんだなと思ってしまう。女の子は、こんなときにも余裕があるのだろうか。

「んふふ」

熱くてトロトロのキスをする。

熱くてトロトロの部分を擦り付ける。ひたぎが細いくびれた腰をゆつくりと揺らす。僕がひたぎの体内で刺激される。ひたぎの体内が僕で刺激される。

「ねえ、ひたぎ——出ちやいそうだよ」

「ん、うん。いいわ。んふ、お願ひ——一杯……頂戴——」

僕達はしばらく無言になり、荒い息だけが続く。

二人は汗だくになる。

股間を擦り付けあう。

激しく。

それでいて、密着したままに。

気持ちよさと、苦しさが同居する時間。

僕とひたぎは、苦しさを分かちあつていた。

僕とひたぎは、快樂を分かちあつていた。

全てが上昇し続ける感覺。

僕もひたぎも、一瞬、息ができなくなる。

その瞬間。

「くつ——」

苦しさと気持ちよさの限界から解放され、僕の痙攣が始まった。

気持ちいい感覺をひたぎの体内に流し込む。流し込み続ける。

ひたぎはそれを受けて震える。

震え続ける。

快感で意味をなす言葉にならない。

愛おしさで離れることができない。

本当に一つになる刹那的な時間。

いや、それすらもわからないくらいの感情で溢れる悦びの時間。

しかし、それも次第に薄れてしまう。

ひたぎは僕の背に爪を食い込ませる。

それを惜しむよう、僕もひたぎも性器を深く結合させる。

口と口を深く重ね、更に体液を交換する。

精液も愛液も唾液も汗も。

身体も。

心も。

全てを。

深く重ねる。

少しでもその時間を延ばそうとして。

だが無情にも、その時間は、その濃度は薄れてしまう。

声を出せないほどのピークを越えると、やつとお

互いの名前を呼びあう。

こんなにも一つになつてゐるのに、その存在を確認するようにして。

必死に。

次第に甘えた声で。

息を整えながら。

お互いの身体をさすりあつて。

心臓が落ち着き、息が整うに連れて睡魔が襲つてくる。

心地いい、疲労感を伴なつて。

「——ふう、一杯……気持ちよくして——もらつち

やつたわね」

「……僕も……今日、すごかつた」

「……んふふ、いじめちゃつたわね」

「……うん」

僕は本当に照れてしまう。

「——でも……まあ、この勝負は……引き分けといつたところかしら」

「……いや、勝負……つて」

「こんなに……ドロドロになっちゃつてあるもの。」

「ドロドロだけにドローね」

「——ああっ、こんなときまで……得意顔、だあ

……」

けれど、いつも程のそれではなかつた。ひたぎもとろんとした目をしていて、相當に眠そうだつたから。同じく僕の突つ込みも、勢いがなかつた。僕はもう、半分、目を瞑つていたかもしれない。

「んふふふつ」

ひたぎは柔らかな頬を、僕の頬に擦りつけながら笑う。

「……うう、それにしても眠いよ——」

「もうこんな時間……だもの——ふふふ。昨日よりは随分と早い時間だけれど。私も、早起きだつたし、もう眠いわ——」

「——じや、引き分けつてことで、僕——もうそろそろ限界——」

「ん、私も——ん、いつもみたいにする?」
「——うん——頼むよ——」

——そして僕は、ひたぎの柔らかで暖かな胸に抱かれたまま、眠りに落ちるのだつた。

甘えたまま。

優しく抱いてもらつたまま。
頭を撫でてもらいながら。

気持ちいい夢の中へ。

夢のような柔らかさの中で。
愛しい女と一緒に——

005

目が覚めると、そこには綺麗なお人形さんのような寝顔があつた。お人形さんみたいというのは、果たして女の子を褒める言葉になるのだろうか。なん

というか本当に作り物のように——完璧なのだ。いや、これは褒めているつもりなのだけれど、本人に言つたら怒られそうな気がする。

それにしても、やつぱり——未だに見蕩れてしまふ。

昔の、出会つた頃のひたぎも、それこそクールビューティーなんて言われて近寄りがたいくらいに綺麗だつたけど、今はそれに加え、とてもいい笑顔だつたり、すごく優しい表情を見せてくれる。安心した表情も見せてくれる。

今もそうだつた。

本当に安心してくれている、柔らかな、寝顔。

それだけで、僕は幸せになつてしまふ。

二人の温度が、心地良い布団の中で——

二人の湿度が、心地良い微睡の中で——

そういうえば、こんな関係になつてから、こんなことになつてから——僕が先に起きたのは初めてだつたかもしれない。いや、そんなことはないか。でも、

こんなにじっくりと、ひたぎの寝顔を観察するのは初めてのことだつた。

僕はこんなに綺麗な子と寝ていたのか——
すやすやと眠るひたぎ。

整つた顔から、細い首筋。

白くなめらかな肌、美しい胸元。

僕はその感触を確かめたくなつてしまふが、折角気持ちよさそうに寝ているのを起こしてしまつても悪いし。

寝息と共に、柔らかく上下する胸。

布団の奥に、少しだけ見える裸体。

とても綺麗だつた。

とても綺麗だつた。

本当に愛しかつた。

乱れたシーツに眠るそんな無防備で美しい姿は、僕だけのものだ。

掛け布団を、寒くないよう少し深めに直す。
こんな、なんもない時間が、とても嬉しい。

ひたぎが先に起きていたときも、こんな時間を感じてくれていたのだろうか。

半分寝惚けながらそんなことを思いつつ、幸せな

気分に浸つていると、ひたぎはぱちっと目を開ける。

僕は、ドキつをしてしまう。

「ん、おはよ」

はにかむような表情を見せてくれてから、ぎゅつ

と僕にしがみついて言つた。とても甘えた声で。

「おはよう」

僕もひたぎを抱きしめながら、甘えながら言つた。

「んーっ」

ひたぎは気持ちよさそうに、身体全体を猫のように伸ばしてから、僕にその柔らかな身体を巻き付けてくる。

でも。

「んー、今日も朝から、こよみくんは元気なのね。

ぐりぐりと遠慮なく押し付けてくるなんて」

途中から声が段々とクールになる。

「あ……ご、ごめん……」

その、なんというか、二人で抱き付いた結果、押し付ける形になつてしまつていたのだ。

「で、でも……あ、朝はしようがないんだよ」

ちょっと、しどろもどろになりながら。

うう、ひたぎだつて、よく知つてる癖に。

ていうか、ひたぎが抱き付いてきたのに！

「まつたく——そんなものを乙女の柔肌に、直接ぐりぐりと押し付けられたら……もう、痛いし、恥ずかしいのよね」

僕の顔を真っ直ぐ見つめるように、僕の頬を痛いくらいに両手で固定しながら、邪悪な笑みを浮かべて。D Sな表情で。

僕は、ちょっと不条理に怒られていた。

でも、この表情は——

「ご、ごめんなさい……」

視線を外すことも許されない僕は、素直に謝ると、ひたぎは右手を布団の中に潜り込ませて——

「もうつ、ちゃんと仕舞つておきなさいな……。ん
つ——」

そんなことを言いながら、ひたぎは僕に絡みついてきて——僕はあるべき場所、とても熱い場所に仕舞われてしまう。

「んふふ、このまま一度寝しちやう？」

ひたぎは片目を瞑り——違和感を我慢するような顔をしながら深く深く息を吐いて。

「ふうう——」

いたずらっぽい目で、とても強気な目で、太ももを僕にすりすりとしながら——

熱い吐息を僕にかけて、柔らかな頬を僕にすりすりとしながら——

僕は、目眩いするくらいの、気持ちいい感覚に襲われてしまう。

そんな中でも、冷静な部分は残つていて——十分に濡れていることは、準備ができていることは、その先端の感触、スムーズに全体が動かせることでわ

かつていた。

ひたぎはドSな表情で、挑発を続ける。

僕は何もしていないので、ひたぎの中で、ゆっくりと——相対的に動いていた。

十分に馴染んでいた。

——だから。

「——ね、ね……ね、寝られるわけないだろう！」

僕は逆上するようにして、ひたぎを仰向けにした。繋がつたまま、その上に乗るようにして。

「もう、こよみ——かわいいつ！ あつ」

僕はそのまま強く抱きしめながら、必死になつてしまふ。

「はあつ、はあつ、はあつ、ひたぎつ！ ——ひた

ぎつ！ ひたぎつ、ひたぎつ、ひたぎつ！」

ひたぎも僕をぎゅうつと締めつけ、決して離さない。

「ん、あつ——ん、くつ、んづん、んづ……」
ほどよい布団の暖さは、ほどよかつた僕達の温も

りは、一瞬で熱に変わってしまう。幸せな湿度は快樂の汗に変わる。

寝起きなのに、こんなにも激しく。

寝起きだから、こんなにも熱く。

掛け布団はめぐれたらままだつた。一瞬寒さを感じたような気がしたけれど、すぐにそんなことを忘れるくらいに、僕達は熱くなっていた。

敷布団が、シーツが、ぐぢやぐぢやに乱れる。ひたぎの形のいい胸が、激しく揺れる。

僕はそれを、両手で更に変形させてしまう。夢から覚めたはずなのに。夢のような感覚が僕達の中核を犯す。

頭がくらくらする。

下半身から、何かが込み上げてくる。

「はあつ、はあつ、はあつ」

「あうう、な、中——奥、んうう、こよみ……そ、

そんなにしたら、んつ、くつ——駄目、よ——」

「くうつ——ひたぎつ……」

「ああつ、ちよ、ちょっと……んく——寝起きなんだから、手加減——して頂戴……んあう——凄い、そんな——んつくう、んつ」

僕は止まることができなかつた。ひたぎはそれを懸命に受け止めていた。

「ひたぎつ……ひたぎつ！ ひたぎつ——ひたぎつひたぎつ」

「あうう、お腹が……んつ、くつ、あつ、お、奥つ——深い、わ——んう……」

僕とひたぎの交じわる音は、僕の肉とひたぎの肉が当たる音は、次第にペースを上げてしまう。

それらの音が、一定のペースを越えると、僕達は声を出せなくなる。もはや、声にならなくなる。

苦しい。

とても苦しい。

次第に息もできなくなる。

けれど、この世界に僕とひたぎしか存在しない幸せな時間。

それを、二人は少しでも引き伸ばすように、少しでも一緒に居られるように、耐える――

二人は震えながらお互いのそれを感じる。息を切らせながら、汗にまみれながら――

…………。

ひたぎが僕の背に爪を食い込ませ、ぴいんと長い足を伸ばしてしまった瞬間だった。

僕とひたぎの意思で激しく重ねていた二人の性器は、一番深く結合した状態で、瞬時に停止してしまう。

――そして、別の動きに変化する。

放出するためと、それを受け取るための動きに。

それらは、もう、僕達の意思では制御できない。

僕達にできることは精々、更に深く交じわり、離れないようになるとくらいだ。

僕は高まつたものを、放出してしまう。

僕は高めたものを、放出してしまう。

全てを、ひたぎの体内に。
ひたぎは全てを受け入れてくれる。

「くつ、はあつ、はあつ、ふう、ご、ごめん――ひたぎ」

「……はう、はあつ、ふう、もうつ、こよみ、乱暴なんだからっ」

そんなことを言いながらも、荒い息の中、苦しそうだけれど、本当に息を切らせて辛そうだけれど、満足したような満ち足りた表情で答えてくれる。

高い体温。

激しい鼓動。

それらが少しずつ収まつてくる。

僕の脳髄を搔き回す大きな快感も、収まつてきていた。

でも、ひたぎは、なめらかな肌を滴る汗がすぐに止まらないように、まだ余韻の中を漂っているよ

うだつた。

だから、僕は少しだけ、体内とその外にある敏感な部分を、優しくゆっくりと刺激する。

そのたびに、ひたぎは悦んでくれて――

そのたびに、少し切なそうな顔をして――

そのたびに、お腹が震えて――

そのたびに、僕をきつく締めつけて――

……………。

だから僕は、もつともつとひたぎの熱さに直接包

まれたままでいたかつたけれど、その一方でちよつ

とだけ冷静になつてきていた。体温が下がらないう

ちにお風呂を沸かしておきたかったのだ。汗でぐち

やぐちやに、それ以外の体液でぐちゅぐちゅになつ

てしまつた僕達だったから。だから、本当に名残惜しいけれど、熱く包み愛してくれている部分から、

僕を引き抜こうとする。

「ん、んあんつ」

その瞬間、それを拒むように最後まで僕についてくるピンク色の粘膜が、いやらしい音を立てると同時に、ひたぎは声を上げてしまう。

僕とひたぎの体液が、糸を引いて零れる。

先端が冷気を感じる。

それは濡れているから、余計に。

それは熱いところにあつたから、余計に。

僕はひたぎから離れて、立ち上がる。

「はあつ、はあつ、お風呂、沸かしてくるよ。ふうう、はあつ、ああ、なんかもう、酷いことになつちやつてるな」

昨日から何度も零していたそれは――こう、俯瞰ふかんして客観的にみてしまうと、シーツの上で酷い状態になつていた。

そこには、汚れてしまつたシーツの上で、乱れてしまつた布団の上で、荒い息に胸を上下させる美しい少女の裸体があつた。

それは、思わず背徳感を覚えてしまいそうな光景

で——僕は不意に、痛いくらいに硬くしてしまった。

その少女はその様子を、黙つて、ちょっと恥ずかし

そうに見つめている。

だから僕は、その横たわる美しい少女を掛け布団

で隠すようにして、風呂場に向かおうとした。

すると、

「ふうつ、はあ……ふふつ、もう、こよみつたら酷

いんだから」

なんて、掛け布団に半分顔を隠しながら、ふざけ

ながら言う。

「ひたぎだつて酷いよ。こんな朝から……あんなこ

とされたら——」

僕はそんな可愛いひたぎをずっと見ていたかつた

けれど、ていうか、すぐにでも、もう一度愛しあい

たかつたけれど、その準備も既に十分以上にできて

いたけど、湯気が出るくらい熱かつた身体も少しす

づ冷えてきたので、寒い思いをする前に風呂を沸か

しに行くことにした。

正直なところ、かなり悩んでからだつたけれど。
「んふふ」

そんな、いつもの幸せな笑みを背にして。

風呂場はキッチンの横だ。

僕は裸のまま風呂場へ向かい、火を入れる。戻る

途中で炬燵部屋のエアコンのスイッチを入れてきた。

「うー、寒い寒い」

寝室に戻つてくると、ひたぎは掛け布団をめくり、

「暖めてあげるから、早くきなさいな」

なんて言つてくれる。

「うん」

布団に入ると、ぎゅーっと抱きしめて暖めてくれ

る。

すりすりとしてくれる。

僕の背中を手で。

太ももと太ももを。

頬と頬を。

それはとても暖かくて柔らかで——とても気持ち

のいい感覚だつた。

「ああ、気持ちいい。でも冷たくない?」

「ふふ。大丈夫」

「ああ、あつたかい。柔らかい」

どさくさにまぎれて、僕は二つの柔らかな部分に埋もれる。

「んふふ。こよみの、ね、お風呂に行くとき、ぶら

ぶらしててかわいかつたわ」

ひたぎは僕のぶらぶらしていた部分を、優しく撫でながら。

「ひたぎのえつち」

「ずっとおっぱいばかり触つてる、こよみほどじやないけれど」

僕はひたぎのぶにぶにした部分を、優しく揉みながら。

「ふふ、いやらしいこよみは、さつきも私のヌードを見て、欲情したでしょう」

「ん、あ、いや」

図星だつた僕は、ちょっと恥ずかしくなつて目線を逸らしてしまう。その先には形のいい、僕の手に揉まれている胸があつた。

「胸ばかりみて、いやらしい」

もう片方の手で僕の顎を上げ、目線を強引に元に戻し、ちょっと僕を睨むようにして。

「どこかで聞いた台詞だな」

「んふふ」

ひたぎは僕の口に右手の指を入れて、左の頬を横に広げてくる。

「ん、右の頬も寂しいかしら?」

なんて言い、今度は左手の指を入れてくる。

「いはいよ、ひはひ」

痛いよ、ひたぎ。って言つたつもりだつたのだが、まともに発音ができなかつた。そんな僕の姿を見てひたぎは楽しそうに笑う。

「ふふ、このくらいで許してあげようかしら」

「なんだよ、もう」

僕とひたぎはずつと、こんな風に、お風呂が沸くまで戯れていたのだった。

「ん、それもあるけど、どうも、この部屋と相性が悪いみたいでさ」

「相性？」

006

「わかんないけどな。なんかホラーもののDVDに出てきた部屋に似てるんだって」

「なによ、それ」

ひたぎは怪訝^{けげん}そうな顔をして言う。

後日談ではなく、長風呂から上がった後の、今回

のオチ。

「ねえ、暦。そういうえば、忍ちゃん見かけないけれど、お仕事忙しいのかしら？」

ひたぎはお気に入りのドライヤーで髪を乾かしながら、僕に訊ねる。

とても気持ちよさそうにして。

僕は炬燵に入りながら、そんな、ちょっと色っぽいひたぎの姿を眺めていた。

ドライヤーと同時に使うとブレーカーが落ちるから、炬燵とエアコンの電源は切つてある。

納得がいかないような表情のまま、ちょっと難し

「——だからさ、どうも忍はこの部屋を怖がってるんじやないかって思うんだけど」

「え、だつて、でも、忍ちゃんつて……」

ひたぎは、納得がいかないような表情をする。

「そうなんだよ。あの忍があな。僕も、ありえないと思つたんだけどさ」

「おかしいわよ」

ひたぎは断言する。

そうな表情のまま、ドライヤーを止めた。

ドライヤーをコンセントから抜き、畳に放り出したまま、炬燵の電源を入れて、わざわざ狭い僕の隣に無理矢理割り込んでくる。僕を強引に押しのけるようにして。

僕はひたぎのお尻に押されながら、炬燵の上にあら、エアコンのリモコンをオンにした。

エアコンの音が部屋に響く。部屋が暖かいと、すぐ動くんだよな。

ひたぎは、しばらく思案するような仕草を見せて、「んん……うふふ。ひょっとして、私達のこと、気を遣つてくれているのかしら」

そんなことを言いながら、僕に寄りかかりながら、僕を押し倒しそうな勢いで甘えてくる。

「うーん、それも違うような気がするんだよなあ」
僕はそんなひたぎを受け止めながら、答えた。

この女、滅茶苦茶スタイルが良くて細い身体をしているのだけれど、女子としては大柄な方だから、

結構、本気で押し倒されると受け止めきれないことがあって――

「あらそう。でも、私は甘えちゃう」

お風呂上がりの石鹼のいい匂いが、シャンプーのいい匂いが、僕の鼻腔をくすぐる。

ひたぎはさらに体重をかけ、僕は完全に押し倒されてしまう。

僕を押し倒すのが趣味のような女。

こいつ、本当に僕を押し倒すのが好きなのだ。体重が無かつた頃の反動かもしれないわね。なんて言つていたけれど。

今の僕達はこんな関係だからまだいいのだが、こんな関係になるちょっと前からこんな調子だったから。

それはもう、当時の僕はどうしたらいいかわからなくて――

それこそ、こんな関係になつた直後だつて、どうしたらいいかわからぬくらいで――

でもまあ勿論、素直に嬉しいんだけど。

本当に愛しいし可愛いし、それに、気持ちいいし。何よりひたぎが無邪気にそうしてくれるのが、それで嬉しく思つてくれるのが、僕は一番幸せなのだ。

思わず僕はひたぎを強く抱いてしまう。こんな風に甘えてくるひたぎに、我慢できるはずがないのだ。こんなに艶なまめかしいひたぎに、我慢ができるはずないのだ。

「馬鹿。月火ちゃんと火憐ちゃんなんかはさ、この部屋に何か出るんじやないか。みたいなこと言つてるしさ。ほら、家賃やたら安かつたじやん？」

僕はひたぎの乾かしたばかりのさらさらの髪を、指に巻きつけるようにいじくりながら言つた。

「もう、折角甘えているのにそんな嫌な話しないで頂戴」

ちよつとむくれた表情で。

「ひたぎは、この手の話、苦手？」

部屋が暖まり、エアコンの温度センサーが、その動作を停止させる。

「ひたぎは、この手の話、静かになる。

「ん、別にそれほどではないけれど……。ムードがないつて言つて……」

なのにひたぎは、甘えた蕩けきつた表情から、急に真面目な顔になつて、僕を驚かそうとする。

「またそんな、子供じやないんだから、そんなので驚かないつて」

僕は呆れながらも、そんなひたぎの子供みたいな振る舞いが可愛くて愛しくて——だからキスをしたくなつて唇を近付けた。

「ちよつと、嫌。冗談じやなくて」

本気でキスを拒否されてしまう。

ひたぎに初めてキスを拒否され（かなりショックだつたのは内緒だ）、僕は一気に冷静になる。

確かに言われてみれば、妙な音が聴こえるよう

気がする。

「隣の人かな——いや、でもこの部屋、そんなに壁薄くないぞ」

「そうよね。そんなはずないわよね——それにしても、なにかしら、この音」

「ん、ああ、紙みたいな、箱を開けるような音?」

押し入れの方角からだ。

「まさか、押し入れの中に何か居るのかしら?」

ひたぎは、ちょっと怯えたような顔をして。

「いや、ま、まさか」

でも、確かに聴こえてくる。

ガサガサ。

カサカサ。

カサツ、カサカサツ。
と。

最悪のケースが頭に浮かんでしまう。

実際のところ、お化け——なんてことはないだろうけれど。

また、怪異だろうか。

いや、怪異でなくとも何か危険な小動物かもしれない。むしろ、それが現実的な回答だろう。

でも、僕は——吸血鬼で、吸血鬼もどきで、何度も何度もこんな目にあつてきているから——

だから、小声で、

「なあ、ひたぎ、万が一のことがあるからさ、お前だけでも逃げられるようにしておいてくれ」

と、言うと、ひたぎは、

「嫌よ」

と、即答する。

僕を本気で睨みながら。

——そうだつた。こいつはそういう女だった。
「わかった。僕の前には出るなよ」

「ふん、文房具がないのが、ちょっとだけ心許無いけれど」

僕もしばらく忍に血を吸わせてないから、正直なところ、どうなるかわからないけど。

まあ、暴漢の類ではなさそりだし。

ひたぎさえ守れればな。

ああ、月火ちゃんの言うとおり、バール買つとき
やよかつたな。

…………。

ガラツ。

覚悟を決めて、異音のする押し入れを開ける。

「……なんじやい。のぶえもんに何の用じや」

…………。

「なんで忍が僕の部屋の押し入れでドーナツ食つて

るんだよ！」

「び、びっくりしたわ」

ひたぎはへなへなと、その場に座り込んでしまう。

「いや、うぬらが仲良く風呂で乳繰りあつてる間に

のう、帰つてきたのじやが」

「つうか、お前、この部屋大丈夫なのか？」

「べ、別に恐くないもん！」

「いや、忍、お前キヤラ変わつてるぞ」

「ていうか冷静に考えたらー、儂がお化けなんぞ怖
がる理由なんてないもんねー。だつて、そもそもあ
のツーテイルの小娘、浮遊靈じやしー。あやつの方
がよつぽどじやわい。それにじや」

いやいや、キヤラ崩壊しそうだつて。誰だお前。

「それに？」

「押し入れ暮らしというのは、昔から憧れていたん
じや。藤子不二雄先生のファンとしてはのう、ここ
で生活せぬわけにはいかんじやろう。かかかつ」

「うるせえよ、にわかファンが」

…………。

まつたく——

ひたぎは、堪えきれずにくすくすと笑つてしまふ。

とても、いい笑顔で。

僕も忍も笑つてしまふ。

「ふふっ。おかえりなさい、忍ちゃん」

「む、ただいまじやの」

忍はちよつとだけ、ばつが悪そうにして。

「ふう、
うむ」
おかげり。
忍」